おじいさんのペン

隆仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おじいさんのペン

【Ｎコード】
Ｎ３１９８Ｄ

【作者名】
隆仁

【あらすじ】
小学４年生のケンタはある日とてもやさしいおじいさんと出会う。おじいさんの家に遊びに行くうちに、ケンタとおじいさんのまわりで不思議なことが起こり始める。

第1話　化物屋敷

今日ボクは1人で学校から帰っていた。

シンちゃんは塾に通い始めて、火曜日と金曜日は一緒じゃない。

リョウちゃんは火曜日と土曜日は空手に通っている。

先週までタクちゃんは一緒だったのに、火曜日にスイミングに行きだした。

だから、火曜日のボクは1人で家まで帰ることになったんだ。

4年生になってからみんな塾とかお稽古とかに通いだした。

ボクも何かしたいとママに言ったんだ。

「ケンちゃんにはそんなのまだ必要ないわよ。いっぱい遊べていいじゃない？」

1人で何をするんだよ。

引きこもりになっても知らないぞ。

ボクは歩きながら小石を蹴って遊んだ。

どのくらい蹴ったらどこまで進むかがポイント。
家に着くまで何回蹴ることになるかな。

思い切り蹴ると知らない人の家の門から中に入っちゃった。
「やっべ」
家を見上げると、古い洋風の家だった。
ボクの学校で有名な化物屋敷だった。
空き家のはずなのに2年生の子が2階の窓に人影を見たとか
探検しようとした5年生の子は怪物に追いかけられたとか
怖い話ばかり聞くところだ。

「どうしよう」
いつもならみんなと一緒に走って通り過ぎるんだけど
小石の記録があと3回で１００回に届くのでとても惜しい。
２階の窓に注意しながら、門へ忍び寄って中をのぞいてみる。

「怪物はいないよな」

そっと門を押してみると

ギィーーッと開く。

ボクは足音をたてないようにゆっくり動く。

小石は家の横の花壇の前にあった。

あと5メートルのところで走って取りにいく。

手を使ってもこの場合は無効としよう。

ボクが小石を拾った瞬間

後ろからダダダッと走ってくるものがいる。

怖くて振り返るとボクより大きな影が突っ込んできた。

ボクは怖くて目も開けられない、声も出ない。

しっかり瞑ったボクのまぶたを生暖かいものがなぞる。

とても臭い！

このまま頭から喰われる・・・神様、助けて！

「レオ、やめなさい。」

人の声が聞こえる。

「助けて！」

ボクは一所懸命に叫んだ。

突然、ボクに乗っかっていた怪物が「ウォン！」と吠えてボクの上からどいていった。

ボクは何とか起き上がり、声のしたほうを見てみると

真っ白い髪・・・真っ白い髭・・・着ているシャツもズボンも真っ白なおじいさんが立っている。

「おじいさん、誰？」

おじいさんは白い眉毛をちょっと上にあげて微笑んだ。

「おやおや、先に聞かれてしまったな。

ワシはここに住んどるんだが、レオが突然走り出したので気にな

ってな。

君はここで何をしているのかな？」

咎めるではなく、とてもやさしい話し方だ。

「ボク、石が入っちゃって・・・取りに・・・」

ボクは握り締めていた石をおじいさんに見せた。

おじいさんはまた眉毛を動かして笑った。

「そうかそうか、レオが驚かして悪かったね。」

おじいさんは右に座っている大きな、これまた真っ白な犬を撫でながら謝ってくれた。

「ううん、ボクも勝手に入ってごめんなさい。」

レオは「ワフッ」とうれしそうに撫でられている。

まさか、犬とは思わなかった。

第2話　モノカキ

おじいさんはボクを家の中に入れてくれた。

レオに舐めまわされたので、顔中がべたべたしていた。

洗面所で顔を洗って、ソファに座る。

大きなリビングにはソファとテーブル、それからきれいな風景の絵画がある。

「さて、ケンタ君はジュースがいいかな？暖かいコーヒーは飲めるかい？」

「ジュース。」

おじいさんはにっこりすると2階へあがっていった。

そして降りてくると、オレンジジュースとクッキーを僕の前に、皿に入ったミルクをレオの前に置いた。

ボクはすごく気になっていることを聞いてみる。

「おじいさんは神様なの？」

「ほ？どうしてだい？」

おじいさんの白い眉毛が持ち上がる。

「さっき、レオに飛びかかられたときに、ボク神様に助けてって言ったんだ。

そしたら、おじいさんが助けてくれた。

それに、キッチンは隣の部屋だよね。

なのに、２階から冷たいジュースを持ってきてくれた。

神様の力なんでしょ？」

ボクは洗面所からリビングに来るまでにキッチンの位置を見ていた。

おじいさんはとても驚いたようだ。眉毛がさっきよりも上に上がった。

ほとんど隠れていたおじいさんの目がはっきりと見える。

「すごい観察力と想像力じゃの。しかし、ワシは神様ではないぞ。

２階にも冷蔵庫があっての。飲み物はたいがいそっちに入れておる。」

おじいさんの声はなぜだかとても説得力があって、やっぱり神様みたいだった。

「おじいさんは何をしてる人なの？」

大きな家に住んでいて、まだ１５時にもなっていないのに仕事をしている風には見えなかった。

「ワシはな、物書きなんじゃ。」

「モノカキ？」

首を傾げるボクにおじいさんはやさしく教えてくれる。

「お話をつくる人のことじゃよ。ワシは家で書くのが好きでな。だから、ずっと家の中におるんじゃ。」

ボクは本を読むのが好きだったので、そのお話が気になった。

「すごい！見てみたい。」

おじいさんはやさしくレオの頭をなでながら、ボクの目をまっすぐ見ていた。

「よし、いいじゃろ。ただし、今は部屋が散らかっておるでな。

また明日来なさい。」

ボクは小石を持って帰るのも忘れて、とても楽しい気分で帰った。

ママが不思議そうな顔で、「どうしたの？」と聞いてきたが、

ボクはおじいさんのことは話さなかった。

知らないお家に行ってるのを知ったら、怒るに決まってる。

ボクは明日になるのが楽しみで、いつもより早くベッドに入る。

「どんなお話かな？楽しみだな。」

レオが椅子の横に臥せってこっちを見ている。心配そうな顔をしている。

「わかっとるよ、レオ。わからんようにやるさ。

さて、明日は何を用意しておくかの？」

第3話　おじいさんの書いた本

学校が終わると、ボクはすぐにおじいさんの家に向かう。
リョウちゃんがサッカーしようって言ってたけど、断った。
ボクはおじいさんといるとなんだかとてもわくわくするんだ。

「こんにちわ～。」

ボクが玄関のピンポンに向かって話すと、知らないおばさんがドアを開けてくれた。

「あらあら、いらっしゃい。
聞いてたとおり、賢そうな子ね。」

「おじいさんいますか？」

「はいはい、ちょっとまってね。
あなた～、ケンタくんがいらっしゃたわよ。」

それを聞いてボクはびっくりしてしまった。
おじいさんとこのおばさんは２０歳くらい離れているように見えた

からだ。

おじいさんが階段をとことこと下りてくる。

レオがべろを振り回しながら、その横を駆け下りてくる。

また抱きつかれるかと思ったら、今度は僕の前で止まり、撫でてほしそうに頭を出してきた

「おじいさん、こんにちわ。」

「ほほっ、ようきたね。まぁ、あがりなさい。」

ボクはレオをひとしきり撫でてからおじいさんの後について2階にあがる。

おじいさんがドアを開けたそこは、右にも左にも本が敷き詰められていて、

まるで学校の図書館みたいだった。

「うわぁ、すごい。コレ、全部おじいさんが書いたの？」

ボクは本棚を眺め回しながらはしゃいでしまった。

「全部ではないよ。・・・右側の棚はワシが読んだ本、左側の棚は

ワシが書いた本じゃよ。」

左側の棚だけでも１００冊は越えている。

ボクは本の背表紙をなぞるだけでわくわくしてきた。

「さて、どんな物語がお望みかな？

冒険、推理、時代物・・・なんでもある。」

ボクはおもむろに冒険モノの物語を手にとって、開いてみた。

とても不思議な感覚・・・

いつも読み進めていくうちに物語の中に引き込まれていくのだけれど、

この本は開いただけで、本の世界の音やにおいまで体感できるようだった。

おじいさんが何か書いている横で

ボクは夢中でページをめくっていく。

おじいさんが時折、寒くないか？とかお腹はすかないか？とか聞いてくれたけれど、

相槌程度の返事しかできなかった。

それくらい面白い。

おじいさんに返事をする度に、おばさんがひざ掛けやお菓子を持ってきてくれた。

とても居心地がよくて時間が経つのも忘れてしまっていた。

あたりが暗くなり始め、おじいさんはペンを置いて、机の中から赤いしおりを取り出す。

「さぁ、今日はここまでにしよう。

1度にたくさん読んでしまってはもったいないじゃろ？」

そう言って、きりのよいところにしおりを差し込んだ。

ボクはこの面白い本を途中やめにしたくなかったけれど、

「また来たときに続きを読めばいいんじゃよ。」

おじいさんの言葉にしぶしぶ本を棚にしまう。

おじいさんもおばさんも門のところまで送ってくれた。

物語の興奮が冷めてないボクは、ゆっくり歩きながら何度も何度も続きを想像していた。

「アレ？今日、おじいさんはずっとボクのそばにいたなぁ。」

なのに、なぜおばさんはひざ掛けやお菓子を持ってきてくれたんだろう。

おじいさんが聞いてからすぐのタイミングだったからおじいさんに聞いたわけでもないだろう。

よくわかんないけど、まぁいいか。

おばさんはとても良い人で気が利くんだ。

第４話　ボクとママ

家に戻ると、ママがとても心配していた。

ボクがいつもの帰り道を2倍の時間をかけてゆっくり帰ったため、あたりは真っ暗になってしまっていたからだ。

僕の家族はママだけだ。

だから、ママはボクに何かあるとすごく心配する。

パパはボクが小学校に上がる前に遠くに単身赴任してしまってから、1度も会っていない。

ボクはもう4年生になるから、わかっているんだ。

・・・・・・パパはもうどこにもいないってこと。

ママが夜中にパパの写真を見て泣いてることも。

ボクの顔がだんだんパパに似てきてママがちょっと悲しそうな顔をするのも。

ボクにパパがもういないってことを教えてくれる。
ボクもパパがいなくて寂しいけれど、ママが悲しい顔をするので、
パパの話はあまりしないことにしてる。

「ごめんなさい、ママ」
ママは優しくボクを抱きしめてくれる。
「遅くなるときは、誰とどこにいるか教えてね。
ママは、心配で何も手がつかなくなっちゃうのよ。」
ママの腕の中でボクはごめんなさい、ともう一度つぶやく。

ママにはおじいさんのことは黙っておくことにした。
知らない大人のところへ行ったのがわかったら、ママはすごく怒る
だろう。
もう行っちゃいけません、とか言われると困る。
まだまだ読みたい物語がたくさんあったから。
だからママには嘘をついた。

「運動会の練習があって、遅くなっちゃったんだ。」

胸がチクンと痛んだけど、自然な感じで話ができた。

事実学校では運動会の練習がもうすぐ始まるし・・・・・・

「そう！何の種目にでるの？」

「えっ？・・・えっと、リレー・・・かな。」

ボクは答えを用意していなかったので、思いつくままにしゃべってしまった。

「まぁ！すごいじゃない。リレーって運動会の主役よ。」

しまった。

何でリレーなんて言ったんだろう。

これじゃママが期待する。

「それじゃ、ママ応援してるわ。

運動会は絶対行くから頑張ってね。」

・・・・・・ほらね。

第5話　リレー選手

今日、ホームルームで運動会の種目に出る選手を決めた。

ボクのクラスはみんなこういうイベントには興味がない、非常にドライなクラスだ。

クラスに1人はいるはずの熱いキャラがいないからだ。

だからみんなめんどくさくない競技に手を挙げる。

担任の杉田先生もわかっているから、サクサクと場を進行させていく。

「じゃあ・・・リレーに出たい人？」

ボクの手だけが挙がる。

クラス中の視線がボクに集まる。

隣の席のリョウちゃんが顔を近づけて小声で言う。

「ケンタ、どうしたんだよ。今決めてんのって、リレーだぜ。」

「ボクにもいろいろ事情があるんだよ。」

多分ボクの顔は困り果てた感じになっているのだろう。

先生が確認する。

「林・・・罰ゲームか？」

「杉田先生、その質問はボクのやる気がそがれるんですけど・・・」

「ああ、すまんすまん。それじゃ、リレーは林と・・・あとはジャンケンだな。」

これでボクはもう引き返せないな。

なぜ、ボクがこんなに困っているかというと・・・

ボクは走るのが苦手じゃない。

ただ、飛びぬけて速いわけでもない。

クラスでも5人はボクより速いヤツがいる。

他のクラスは多分速い順に選手に選ばれるはずだから。

僕のクラスがビリになるのが誰でもわかる。

せっかくママが応援に来てくれるのに、ボクはごぼう抜きされる姿を見せないとならないのだ。

少しでもビリになる可能性を下げようと放課後に練習をしようとリレーの選手を探してみた。

鈴木くんはすでにいなかったし、山本さんはこれからスイミングに行かなければならないらしい。

さすがボクのクラスメイト・・・どこまでもドライだな。

残ってくれた近藤さんがボクに聞いてきた。

「ねぇ、林くん。何でそんなにリレー勝ちたいの？」

「・・・出るからには頑張りたいじゃん。」

そんなボクの答えに満足してないのか、近藤さんはボクの目を覗き込んでくる。

「ごめん。実はね・・・」

ボクは近藤さんに全部話した。

おじいさんのこと、ママのこと・・・そしてパパのこと。

どうしてだろう。

友達にも言えなかったことを近藤さんには話せてしまった。
近藤さんは話を聞き終わると少し涙ぐんでいた。
「よっし！ワタシも協力してあげる。
がんばってイイとこ見せよう。」
やった！少しだけ望みが出てきたぞ。

「その代わり、そのおじいさんの家にワタシも連れて行ってね。」
「え？」
「面白そうじゃない。林くんが独り占めするなんてずるいわ。」
ボクは少し考えたけど、近藤さんなら特に問題ないかもね。
「わかった。おじいさんには言っておくよ。
・・・それと、ケンタでいいよ。みんなそう呼んでるから。」
近藤さんはにっこり笑って荷物をまとめだした。
「ありがとう。
じゃあ、ワタシもナオでいいよ、ナオミだから。

今日はもう遅いから帰るね。

バイバイ、ケンタくん。」

「あぁ、バイバイ、ナオちゃん。」

走り去っていく彼女の後姿はとても楽しそうだった。

久しぶりに女子とこんなに長く話したけど、すごく楽しかったな。

「でも・・・女子はちゃっかりしてるなぁ。

おじいさんに聞いてみないとなぁ。」

ボクはやるべきことがどんどん増えていくようなそんな感じがして、

帰り道をとぼとぼいつもより重い足取りで歩いた。

第6話　ボクの才能

その日の帰りにおじいさんの家に寄ってみる。

おばさんは出かけているようだったけど、おじいさんが相変わらず優しい笑顔で迎えてくれた。

正直な話、おじいさんになんて伝えようか悩んでいた。

もし、おじいさんの機嫌を損ねたらボクまでこの家に遊びに来れなくなる・・・。

「さて、何か頼みごとかね？」

「どうして・・・」

わかったの？と聞こうとしたけど、おじいさんが笑顔を崩さずに言った。

「ワシはモノカキじゃよ。

人の感情を文章で表現することができる。

それならば、表情からそのときの感情を読み取ることなど・・・

簡単カンタン、ほほっ。」

ボクはただただ、驚くことしかできなかった。

「とはいっても、詳しい話は直接聞かんとのう。」

ボクは仕方なくうなづく。

おじいさんにソファに座ってもらい、ボクは大きな風景画の前に立った。

「まずは、ボクの家族について話さないといけない・・・・・・」

今日はこの話は2度目だけど、ボクは話の流れがわかりやすいように説明しだした。

おじいさんも白い眉を動かして、いろいろリアクションしてくれるから、ついつい話に熱が入ってしまう。

ボクは身振り手振りを加えて話をした。

「・・・・・・というわけで、そのナオちゃんが、ここに連れて来てほしいって言ってるんだ。

もちろん、おじいさんがいやだったら、違う条件を出してもらうんだけど・・・」

おじいさんはあいかわらずニコニコしていた。

常に笑顔でいるから、何を考えているのか読み取りづらい。

「ほっ、かまわんよ。
ケンタくんの友達が来るのは大歓迎じゃ。」
ボクはホッと胸をなでおろした。
ナオちゃんも喜ぶだろう。

「ところでケンタくん・・・
キミは自分の才能をわかっておるかな?」
突然のおじいさんの言葉にボクは首をかしげる。
才能って何のことだろうか?
「今キミはワシに家や学校での出来事を聞かせてくれただけじゃ。
しかしの・・・キミの話の何と面白いことか。
まるでワシもキミ自身になったように感情の波が押し寄せてくる。
物語を書くのが本業のワシでさえ、キミの話に聞き入ってしまった。
キミの才能とは、その話を創る力、人を惹きこむ力じゃよ。」

ボクはそれがすごいことなのかはよくわからなかったが、話を理解してもらえたのはうれしかった。

「ボク、国語は得意だしね。」

そういうとおじいさんは高らかに笑った。

そしてボクにある提案を投げかける。

「ケンタくん、今まで通りワシの家に来て本をたくさん読んでおくれ。

それから、キミが気に入ったお話をワシに読んで聞かせてくれんかの。」

ボクはまだまだおじいさんの本は読み足りなかったし、願ったり叶ったりだった。

「もちろんいいよ。

じゃぁ、今度はナオちゃんも連れてくるからね。」

ボクが帰ろうとすると、おじいさんが呼び止めた。

「ああ、ケンタくん。

今度いつ来るか、悪いがここに書いておいてくれんかの？」

おじいさんは胸ポケットから古びた万年筆を取り出した。

使い込まれた万年筆は黒地に羽の模様が入っていたが、ところどころ茶色くくすんでいた。

ボクは万年筆を受け取り、おじいさんの手帳に書き入れた。

『次の水曜日にケンタが家に遊びに来る。』

その万年筆はなぜかずっと昔から使っていたもののようにとても書きやすかった。

「はい。それじゃ、またね。」

ケンタはすぐ出て行ってしまったから気づかなかったが、おじいさんの手帳に書かれた文字は一瞬パッと光り、そのまま空中で粉々になって消えてしまった。

「ほっ・・・すばらしい。」

第7話　練習

運動会まであと2週間しかない。

ボクは必死でリレーの練習をすることにした。

選手を決めた日からナオちゃんが毎日ボクの練習に付き合ってくれる。

鈴木くんや山本さんも時間が空けば練習に参加してくれた。

それどころか、リョウちゃんやシンちゃんまでボクのフォームをチェックしてくれたり、バトンの受け渡しについてアドバイスをくれたりした。

ドライなクラスメイトたちだと思っていたけど、今はとても頼りになる。

ただ、杉田先生は感動したのか、いつも練習を見に来てはむせび泣いている。

あんまり大きな声で泣くから、正直うっとうしい。

見かねたタクちゃんが先生の背中をさすりながら言った。

「先生、ケンタたちが練習しやすいようにグラウンドを掃除しようよ。

先生は向こうの端から草抜きしてよ。

ボクらはこっちから抜いていくから。」

先生は涙をぬぐいながら、そうだな、と呟いて走っていった。

先生が走っていったのは時期的に使っていないプールだった。

あのあたりは草がボクの背丈くらいまで伸びている。

今日1日じゃ抜き終わらないだろう。

タクちゃんはボクらのほうに振り返ると、満面の笑みで親指を立てた。

『・・・先生、ご愁傷様。』

一瞬かわいそうだったが、気にせず練習を再開する。

あと2週間で足が速くなるとは思えないので、バトンの受け渡しの練習が主だった。

走る順番は、山本さん、鈴木くん、ナオちゃん、そしてアンカーがボク。

ナオちゃんが推薦してくれた。

この前話をしてからナオちゃんはボクに気を使ってくれる。
コレもおじいさんの言っていた僕の才能の影響なのかな。

そう、あれからおじいさんの家にも2回ほどナオちゃんを連れていった。
おじいさんとナオちゃんはすぐに仲良くなり、レオもなついている。
ただ、困ったことにおじいさんがナオちゃんにボクとおじいさんの朗読会の話を聞かせてしまった。
ナオちゃんが目をキラキラさせて「ワタシも聞きたい！」なんて言うので、
ついＯＫしてしまった。
はぁ、何の本を読もうかなぁ。

「ケンタくん！」
突然呼ばれてボクはハッとなった。
リレーの練習中にボーっとしていたため、バトンを受け取りそこなってしまった。

練習に付き合ってくれている皆から落胆の声が聞こえてくる。

「ごめん。」

ボクの様子を見て、ナオちゃんが皆に話しかけた。

「今日はもう終わりにしよっ。そろそろバトンが見えなくなってきたし、ワタシ疲れちゃった。」

その一声で皆がまばらに解散していく。

・・・ナオちゃんって、リーダーシップがあるんだなぁ。

それに比べてボクは・・・

「ケンタく～ん」

とぼとぼと通学路を帰っていると、ナオちゃんが走ってきた。

「どうしたの？」

「一緒にかえろっ！」

ボクの返事を待たずにナオちゃんはボクの手を取って走り出した。

先に帰っていたリョウちゃんやシンちゃんを追い越して行くときにリョウちゃんの口笛の音やシンちゃんの「アツイねぇ」ていう声が聞こえたがリアクションする前に走り抜けた。

近くに誰も居なくなるまで走ってから、ナオちゃんはボクのほうに向いた。

お互い肩で息をしている。

「どう、したの？」

「ケンタくん、さっき、朗読会、のこと、考えてたでしょ。」

ボクは思わずドキッとした。ナオちゃんはこういうときとても鋭い。

2人で深呼吸したあとにナオちゃんは続けて言う。

「悩むのもわかるけど、もう運動会もすぐだから、練習に集中しよ？」

やさしく話してくれるナオちゃんにボクは無言でうなづく。

「ということで、これからおじいさんの家で朗読会ね。」

「えっ？」

目を丸くするボクにナオちゃんはにっこりと微笑んだ。

「練習のことだけ考えるために朗読会は今日終わらせちゃおう！

ワタシ、ケンタくんに読んでほしい本があるの。」

そういうがはやいか、ナオちゃんはボクの手を取り、また走り始めた。

・・・女の子って、ちゃっかりしてる・・・

あとで知ったことだけど、

ボクらがこんなやり取りをしている間も杉田先生はプールの脇でせっせと草取りをしていたという。

翌日にいつの間にか一人ぼっちだったと泣きながら訴える杉田先生は昼休みまで授業もせずにいじけていた。

『先生・・・とにかく風邪引かなくてよかったです。』

第8話　朗読会

ボクとナオちゃんはそのままおじいさんの家をたずねた。

「？

今日は来ると言うとった日じゃったかな？

まぁ、何も用意しとらんがお上がり。」

おじいさんは快くボクらを招き入れてくれた。

ナオちゃんがボクわき腹を肘でこづいた。

うかがうように振り向くと、案の定目をキラキラさせて何かを期待している。

ボクは気づかれないようにため息をついた。

おじいさんが2階の書斎へ上がろうとしていたので、呼び止める。

「おじいさん。

今日はね、朗読会をしようかと思って。

ホラ、前に話したヤツ・・・。」

おじいさんの眉がゆっくりハの字になる。

「ほっほっ、決心できたのかい。

それはよかった。

それで？どの本を読んでくれるんじゃ？」

「最初の1回目から悪いんだけど、ナオちゃんのリクエストなんだ。」

ボクはリビングのソファに腰掛けているナオちゃんを振り返った。

「おじいさん、ごめんなさい。

ワタシがケンタくんに無理に頼んじゃったの。

次はおじいさんの読んでほしい本でいいから。」

「ほっほっほっ、かまわんよ。

さぁ、どの本だい？取ってきてあげよう。」

おじいさんはにっこりと微笑んで階段を改めて上りはじめる。

「ありがとう。

オー・ヘンリーの“賢者の贈り物”って本よ。

ワタシ、あのお話が大好きなの。」

このとき初めて今回朗読する本を知ってボクはホッと胸を撫で下ろした。

よかった。知ってる本だ。

これから読む本の内容を知っているのと知らないのとではやっぱり読み方がぜんぜん違うからだ。

なんだかんだといってボクも朗読会に対して前向きになってきたようだ。

「良い選択じゃな。

ワシもあの話は好きじゃよ。

・・・2人ともソファに座っていなさい。

紅茶でも飲むといい。」

書斎で本を探しているのか、おじいさんの声はかなり小さかった。

「「ありがとう。」」

ボクらはおじいさんに聞こえるよう大きめの声で返事をする。

ボクがかばんを置き、ナオちゃんの隣に腰掛けたときだった。

キッチンからの扉が開き、おじいさんの奥さんが紅茶を持ってきてくれた。

「あ、おばさん。

こんにちは。ありがとうございます。」

ボクらは口々にお礼を言い、おじいさんが下りてくるのを、ミルクたっぷりの紅茶を飲みながら待った。

しばらくしておじいさんが本を小脇に抱え、両手で椅子を持って下りてきた。

「おまたせ。なかなか良い椅子じゃろう。

さぁ、ケンタくん。こっちに来て座りなさい。」

そう言っておじいさんはボクを椅子のほうへ連れてくると自分はソファへ腰掛ける。

その椅子は少し背が高くて、ボクが座るとちょうど足の位置にパイプがあたるようになっていた。

ステンレスに黒く焼付けがされていて、この家では珍しくモダンな感じだった。

ボクの心臓は徐々に早く大きく脈打つようになっていた。

『落ち着け・・・大丈夫』

ボクはおじいさんから受け取った本の背表紙を撫でながら、２回深く深呼吸した。

おじいさんの用意してくれた椅子に座り、おじいさんとナオちゃん、そしてソファの横に立っているおばさんとそのまた横で寝そべっているレオを見渡した。

「じゃぁ、これから読むけど・・・聞き苦しかったらごめんね。」

「ほっほっ、そんなことを気にすることはないよ。

君の思うように読み、それを聞かせておくれ。」

おじいさんの言葉にボクは無言でうなづき、本を開いた。

「賢者の贈り物・・・オー・ヘンリ。

１ドル８７セント。それだけだ。しかも、そのうち６０セントは１セント銅貨である。

それだって、乾物屋や八百屋や肉屋で買い物をするたびに値切って、そんなしみったれたけちくささを非難する無言の声に顔から火が出る思いをしながら、１枚２枚と貯めた銅貨なのだ。

デラは、それを３度かぞえなおした。１ドル８７セント。明日はクリスマスだというのに。

・・・」

ケンタはゆっくり抑揚をつけながら、感情豊かに朗読した。
おじいさんもナオちゃんも、レオまでもがケンタを見つめ、聞き入っていた。

「・・・

やっとそれを見つけた。たしかにそれはジムのためにつくられたもので、ほかの誰のためのものでもなかった。

ほかのどの店にも、こういうものはなかった。どの店も入念に探しまわったあげくなのだ。

・・・」

ケンタの話を聞いているものには見えていた。
ジムへのプレゼントを選ぶデラの姿が・・・。
デラの姿を見て、驚くジムの表情が・・・。

「・・・

贈り物をあげたりもらったりする人々の中で、この2人のような人たちこそ最も賢明なのである。

どこにいようとも、彼らこそは“賢者”なのだ。

彼らこそ東方の賢者なのだ。

・・・おしまい。」

ケンタはゆっくり本を閉じる。

まるでその作業さえ、朗読の一部でもあるように。

一瞬の間をおいて、拍手がおきた。

短編を1作読む10分の間に2人の心はケンタにつかまれていたのだ。

「ありがとう。

ボク、ちゃんと読めてたかな。」

「すっごくよかったわ。
主人公の2人が目に浮かんだもの。」
ナオちゃんは飛び切りのほめ言葉をボクに聞かせてくれた。
「うむ。すばらしい。
毎日でも聞きたくなるようじゃ。」
おじいさんもうなづいている。
ボクはなんだか気分が良くなった。
そして、またボクの読むお話を聞いてもらいたくなった。
「また、聞いてもらってもいい？
つぎに読む本も探しておくから。」
「モチロンじゃとも。
いつでも聞かせておくれ。」
おじいさんの言葉に気をよくして、その日は帰り道まで浮かれっぽなしだった。
途中の別れ際にナオちゃんに釘を刺される始末だ。

「ケンタくん、気分転換になったし、明日からは練習中はリレーに集中してね。」

ボクは少したじろきながら、ナオちゃんにお礼を言った。

「う、うん。わかってるよ。

ナオちゃん、ありがとう。キミのおかげだよ。」

ナオちゃんは少し照れたのか、うつむいて頬をかいてしまった。

「ワタシは別に・・・。

そ、それじゃぁね。バイバイ。」

そういってナオちゃんは振り返らずに家に帰っていった。

「あの子はすばらしいのう、レオ。

すばらしい想像力と観察力、そしてそれをヒトに伝えられる力があるわい。」

おじいさんはレオの頭を撫で、つぶやいた。

そして、おばさんへと目を向ける。その目は普段見せることのない悲しさを表していた。

「サトミ、わしにあの子のような力があれば、お前のすべてを書き表わせたのにのう。

許しておくれ。」

おばさんはその言葉を聞くと、少し微笑んだ。

おじいさんがレオに目を向け、頭を撫でる。

その目の前にはおばさんの姿はいなくなっていた。

第８話　朗読会（後書き）

※参考資料

Ｏ・ヘンリ短編集（二）　大久保康雄訳

第9話　決戦の朝

ついに運動会がやってきた。

ボクはドキドキして朝の6時に目が覚めてしまった。

開会式は9時からなので、8時半に学校に行けばいい。

2度寝もできないので、学校の体操服に着替えて1階のリビングに下りていくと、ママまですでに起きていた。

「おはよう。もう起きたの？

今日はとびきりのお弁当作ってあげるからね。

ケンちゃんがトップになれるように好きなのばかり入れてあげるから。」

ママ、相当プレッシャーかけてきたね。

というのも、朗読会以後日が暮れるまでリレーの練習、帰ってからも毎日走っていたので、ママはボクに期待を抱いても仕方ないかもしれない。

「そうそう、毎日一緒に帰るナオちゃんの分も作ろうかしら。」

そう、朗読会からナオちゃんと一緒に下校するようになった。

単純に最後まで練習するのが一緒なんだけど、1度ママがボクとナオちゃんが帰っている姿を目撃してから、しょっちゅうナオちゃんのことを聞いてくる。

「いや、ナオちゃんは自分のお弁当あると思うよ。」

「でも、ママの料理がおいしいってわかってくれたら、食べに来てくれるかもしれないじゃない。」

ママはなんだかニヤニヤしている。

ボクももうママが考えていることがわかってきたので、あがっていたテンションを下げるようにため息をついた。

「そんなんじゃないんだって。

前にも言ったろ？」

あら、そう。なんて言いながらママはお弁当作りに戻った。

なんですぐそういう風に受け止めるかな・・・。

そんなママの後姿を見ながら、ボクは朝食のトーストにかじりついていた。

ピンポンッとインターホンが鳴った。

ママが忙しそうだったので、ボクが通話ボタンを押して答える。

「どちら様ですか？」

「あ、ケンタくん？おはよう。

一緒に学校行かない？」

ナオちゃん、迎えに来てくれたんだ。

後頭部に視線を感じて、振り返るとママがめちゃくちゃニヤついていた。

ボクはちょっと恥ずかしくなったので、荷物を取ると大急ぎで玄関まで走った。

「行ってきま～す！」

「はいはい、行ってらっしゃい。」

「おまたせ、ナオちゃん。

今日は早いね。」

ボクがあわててでてきたので、準備ができるまで待ってくれている。

「うん。ドキドキして早く目が覚めちゃったの。」

「あはっ、ボクと一緒だ。」

ナオちゃんと話していると緊張が解けていくようだ。

あとは・・・結果を出すだけだ。

ボクらは案の定学校に早く着きすぎてしまったため、バトンの受け渡しの練習をグラウンドの隅でしていた。

そのうち、バラバラとクラスの皆が集まりだし、それぞれに柔軟や練習をし始めた。

「へぇ、皆やる気になってるなぁ。うちのクラスじゃないみたいだなぁ。」

ボクは練習の手を止めて、クラスの皆を見渡した。

こんなにクラスの皆で一生懸命になることなんてなかった。

そのとき、バシッと背中を叩かれた。

リョウちゃんが腕組みをして、ニコニコしている。

「何言ってんだ。ぜ～んぶお前のためだろ。」

ボクは背中をさすりながら、必死で考えたけどリョウちゃんの言ってる意味はさっぱりだった。

「なぁ、皆！ケンタのママのために学年優勝するぞ！！」

「おおおぉぉぉ！！！」

クラスの皆の心がひとつになっている。

・・・・・・・・・・・・

「ハハッ・・・話がでかくなってる・・・。」

ボクが顔を引きつらせていると、ナオちゃんがチラッと舌を出していた。

「ごめんね、ワタシの説明が悪かったみたい。」

どうやら、ナオちゃんはボクのした話をパパのことやおじいさんのことを隠して話したらしい。

それでこの勘違いのチームワークができたならそれはそれですごい才能だ。

「まぁ、ボクはボクのできることをするよ。」

そう言ったボクの顔はまだ引きつったままだった。

第１０話　お弁当と殺人兵器

ボクのプレッシャーをよそに、運動会はどんどん進行していった。
ボクら４年Ｂ組は午前の部が終わった時点で５クラス中２位。
全体競技の綱引きでは、相手チームから『鬼と戦っているようだった』と褒め言葉をいただいた。

「皆、今のところ順調よ！
午後の得点競技は借り物競争、２人３脚、クラス対抗リレーの３種目。
出番の終わった選手はこれからしっかり応援するよ！！」

『おぉ～～っ！』

すっかりリーダーになってしまったナオちゃんと勝ちに燃えるクラスメイトたち。
キャラが違いすぎてつっこめない。
逆につっこむとボクがさむいみたいな空気になりそう。

「それじゃぁ、各自昼食をとりましょう。体を冷やさないようにね。」

ナオちゃんの言葉で解散していくクラスメイト。

さて、ボクも昼食にしよう。

お弁当を持ってきてくれているママを探していると、よく見知ったヒトを見つけた。

「おじいさん！？」

おじいさんはボクを見つけるとゆっくり近づいてきた。

「やぁ、がんばっとるの。

運動会のことは聞いていたから、応援にきたんじゃが。

迷惑じゃったかの？」

「そんなことないよ、ありがとう。

最後のリレーに出るからそれも見ていてくれる？」

おじいさんはにっこり笑って、モチロンとうなづいてくれた。

おじいさんと雑談しているところにママがお弁当を持ってきた。

「ケンちゃん、お昼にしましょう。

あら、そちらは・・・」

ボクはおじいさんの説明をどうしようかと慌てたが、正直に話すことにした。

「実は最近、おじいさんの家に遊びに行かせてもらってて・・・」

「則武さん、お元気ですか？」

「ええ、最近は特に。」

あれ？2人は普通に会話を進めている。

不思議そうにしているボクにママが気づいて教えてくれる。

「則武さんは町内が一緒で役員もしたことがあるから、よく話をするのよ。

ケンちゃんはどこで知り合ったの？」

ボクはおじいさんとの出会いのことやよく家に行っていることを話した。補足でおじいさんが朗読会のことまで話してしまったが。

「へぇ、それは知らなかったな。また、ママにもお話を聞かせてね。」

ボクはあいまいに返事をすることしかできなかった。

「ケンタくん、お昼一緒しない？」

振り返るとナオちゃんがお弁当を持って立っていた。
リョウちゃんやシンちゃんたちもそろっていた。
「モチロンだよ。この辺に広げようか？」
ママが持ってきてくれたビニールシートを広げ、ママとおじいさん、ボクとナオちゃんとクラスメートの皆でお弁当を広げた。
和気あいあいとお弁当を食べた。
とんでもない爆弾が潜んでいることも知らずに・・・。
「ナオミ、これ何？つくってきたの？」
クラスメートの1人がナオちゃんの横に置いてある包みを開けるとおにぎりが入っていた。
「あ、そうなの。あんまり自信はないけど、皆に食べてもらおうと思って。」
「へぇ、いただきま～す。」
パクッとその子が食べた瞬間、顔色がどんどん土気色に変わっていくのをボクは、いやクラスの皆が目撃してしまった。
「皆も食べてね。」
ナオちゃんは隣の子が全力疾走でトイレに行ったことに気づかず、殺人兵器を勧めている。

まずい、このままだと午後の競技に支障が出る・・・。

ボクとクラスメートたちは瞬時にアイコンタクトで誰が犠牲になるかを決めた。

それはもう得点競技に出ない、応援部隊が選ばれた。

「ぐほっ」

「ぼへぇ」

「み、みず・・・」

決死の特攻を終えたクラスメートの死に、心の中で合掌した。

ところが、ナオちゃんは最後の１つをボクの目の前にもってきた。

「はい、ケンタくんもどうぞ。」

やばい、どう考えても逃げ場がない。

コレは正直にナオちゃんへ伝えるべきか？

いや、今までの皆の頑張りが無駄になってしまう。

ここは覚悟を決めて食べよう。

ボクはおにぎりを取ろうと手を伸ばす。

が、上から現れた手におにぎりは持っていかれてしまった。

「ふむふむ、なかなかうまいぞ、近藤は家庭科得意なんだな。」

杉田先生ぇ～～！グッジョブ！！

日頃まったく役に立たないのに、今日に限ってはファインプレーです。

ナオちゃんはちょっと涙目になっていた。

「せっかくケンタくんに食べてもらおうと思ってたのに・・・。

先生、ひどい。」

「まぁまぁ、また今度ご馳走してよ。

ほら、昼休みも終わりそうだし、皆戻ろう？」

ボクらはママとおじいさんに挨拶してぞろぞろとクラス席に戻っていく。

人数が半分以下になっていることにナオちゃんは気づいていない。

末恐ろしい、何とかナオちゃんの手料理を食べる機会だけは全力で避けなければ・・・

ところで、杉田先生は大丈夫なんだろうか？

おにぎりを食べても普通にしていた。

そんなことを考えていたら、遠くのほうで「おんぎゃぁ！」と杉田先生の断末魔の叫びが聞こえてきた。

“先生、ありがとう。先生のことは忘れないよ”

第１１話　最後の一押し

運動会はいよいよ最後の１種目を残すのみだ。

ボクのいる４年Ｂ組は現在３位。

昼休みに味方からの思わぬ反乱に遭い、順位とモチベーションを落としてしまった。

本人が分かっていないだけに余計にたちが悪かった。

でも、最後のクラス対抗リレーで１着になれば学年優勝ができる位置にはいる。

ここまできたらボクも男を見せないと。

横に並んだ各クラスのアンカーの顔も緊張しているようだ。

ボクはマークすべき相手の表情を伺う。

現在１位のＡ組の安田くん、この中で一番早い現在２位のＤ組の中村くん。この２人には何としても負けられない。

競技は第３走者までは５０ｍ、アンカーだけ１００ｍを走る。

だからボクらはまだ走る位置にはついていない。

ボクは刻一刻と迫る自分の出番を待つ間、驚くほど冷静だった。

朗読会で度胸がついたのかもしれない。

おじいさんに感謝しないと。

ボクがふと顔を上げると目の前の観客席におじいさんがいた。

いつも使っている羽模様のついた万年筆をボクに向かって振っていた。

そして、他の歓声で聞こえるはずがないおじいさんの静かな声が聞こえてきた。

「大丈夫、キミがどれだけ一生懸命に練習してきたかは神様も見ておられるよ。」

その言葉を聞いたとき、ボクはおじいさんに向かってにっこり微笑んだ。

パンッ！

軽い銃声の後、第1走者が一斉に走り出していた。

ボクの視線は一気にそっちに注がれる。

目の端でおじいさんが何か手帳に書き込んでいるような姿を捉えたけど、それどころじゃなかった。

山本さんは・・・

何と1位で抜け出している。

よし、このまま来てくれ！

鈴木くんとのバトンの受け渡しはスムーズだった。

あれだけ練習したんだ。いけるぞ！

鈴木くんはいつも以上に速く見えた。

でも、A組の新田くんが速い。

一気にかわされてしまった。

D組も迫ってきた。

大丈夫、まだいける。

第3走者のナオちゃんにバトンが渡ったとき、A組は5m先にいて、D組とは接戦だった。

この時点でボクらアンカー走者は配置につく。

ナオちゃん、頑張れ！

ボクは目を閉じてゆっくり深呼吸をする。

「ケンタくんっ！」

ナオちゃんの声が聞こえた。

ボクは弾かれたように助走をする。

相手を確認しなくたってボクの出す手にバトンが当たる事は今までの練習で分かっていた。

手のひらに丸い筒が当たった瞬間、それを掴んで全速力で走った。

他の走者は！？

誰の背中も見えない。

右側体ひとつ分だけボクの前にＡ組の安田くんが走っている。

コイツを抜けば、ボクがトップだ。

後ろにも誰かが走っている音が聞こえるけど、気にしていられない。

トップになるんだ。

練習の成果か離されずについていく。でも・・・

差が縮まらない。

あと２０ｍ・・・「ケンタ！頑張って！」

あと１０ｍ・・・「ケンタくん！勝って！！」

あと５ｍ・・・・あともう少し・・・

ボクの横で何かが光った。そして誰もいるはずのない場所から、頭の上から声が聞こえた。

『あと一押しってとこか？今回は特別サービスだ。』

若くもなく、年寄りでもない、どこか遠くから聞こえるような声。

その声のあと、背中を押されるような感触があった。

ボクは思わず前につんのめって倒れてしまった。

嘘だろ、こんなのありかよ。こけて負けるなんてめちゃくちゃかっこ悪いよ。

ボクは転んだまま後ろを振り返った。

そこには誰もいなかった。ボクは誰に押されたんだ？

ボクの疑問を吹き飛ばすように、ボクは抱きつかれてまた倒れてしまった。

ナオちゃんやクラスの皆にもみくちゃにされる。

「やったわ、ケンタくん。優勝よ！」

「すごいぞ、ケンタ！」

ボクにはよく分からなかったが、ボクが倒れるとき、ほんの一瞬安田くんの前に出てゴールしたらしい。

物語みたいな話だけど、ボクの胸のあたりにゴールテープがくっついているのがその証拠だった。

ボクが1位・・・？

「・・・った。・・・・勝った！勝ったんだ！！」

ボクは皆と抱き合って喜んだ。

「ケンちゃん、おめでとう！」

ママの声でそちらのほうに振り返る。

その方向はさっき、何かが光ったほうだ。

ママとおじいさんがこちらを見ている。

ママは涙を流して、おじいさんは白い眉をちょっと上にあげて微笑んでいる。

おじいさん・・・？

おじいさんは何か隠している。

だって、おじいさんはボクと目を合わそうとしていないから。

ボクは皆の歓声の中にいても素直に喜べなくなっていた。

・・・自分の力で勝った気がしなかった。

第１２話　おじいさんの秘密

運動会の閉会式も、優勝を皆で喜んだＨＲもボクの心に残っていない。

運動会のあと、皆と別れてすぐおじいさんの家に向かった。

おじいさんは何か隠している。

リレーのときに見た光や声のことも必ずおじいさんと関係してるはずだ。

ボクがおじいさんの家の門を開けると、おばさんが外に立っていた。

ボクに微笑みかけておじぎする。

「いらっしゃい、ケンタくん。

どうぞ、中であの人が待ってるわ。」

ボクを家に招きいれ、２階のおじいさんの部屋へ案内してくれる。

とても緊張する。

おじいさんが秘密にしていること・・・

リレーのときの不思議な声・・・
本当は知らないほうがいいことなんじゃないかって思う。
でも、それでもボクは、おじいさんが何をしたのかを知らないといけないんだ。

おじいさんの部屋の前で、ゆっくり深呼吸した。
いつものドアがやけに重いような気がした。
おじいさんは椅子に腰掛け、こっちを向いていた。
いつもの穏やかな笑顔をして、レオの頭を撫でている。
「何でボクが来たか分かる？」
緊張したからか、うまい言い回しができない。
おじいさんの表情に集中してしまっている。
「ああ、分かるとも。光が見えたんじゃろう？
金色に輝く光がのう。」
「そう、あの光は何なの？あの声は誰？」

しゃべる度に混乱していくようだった。
冷静でいられない。
「落ち着きなさい。
これから話すことは少し難しいでの。
紅茶でも飲みなさい。」
そう言っておじいさんは机の上の原稿用紙に何か書き始めた。
おじいさんの書いたところが金色に輝いて、その光がボクの横をすり抜けて1階の方へ下りていった。
ボクは声も出せず、光が出ていったほうを見つめるしかできなかった。
「怖がることはない。
今の光はワシの書いた“望み”じゃよ。
『サトミが淹れたての紅茶をケンタくんに渡す』と書いた。」
サトミっていうのはおばさんの名前だ。
おじいさんの言った内容を理解しようと頭の中で何度も考える。
そのうち、ボクの鼻に紅茶の甘い香りが漂ってきた。

おばさんがティーポットとカップを運んでくれた。
ボクの横のテーブルに紅茶を置くと、にっこりと微笑んだ。
「熱いから気をつけてね。」
そういうと、おばさんは体の周りが金色に光りだし、笑顔のまま消えてしまった。

ボクはおばさんの居た空間を、おばさんの持ってきた紅茶を、そしておじいさんをゆっくり目で追っていった。
おじいさんはやさしく微笑んでいる。
目の前の不思議な出来事の答えをおそるおそる口に出す。
「おじいさんの書いたことが本当になる？」
「そう。正確には書いた“望み”じゃ。
望まずに書いたとしてもそれはただの文章でしかない。
本当に望んでいることをこのペンで書くことで現実にすることができる。」
そこまで言うと、おじいさんはボクの横のテーブルで紅茶をカップに注ぎだした。

熱いから気をつけなさい、とボクに紅茶を渡し、また自分の椅子に座る。

「さて、理解できたかな？」

ボクは紅茶のカップをテーブルに置いて、自分の中のもやもやをおじいさんに聞いてみた。

「リレーの時も書いていたでしょ？

なんて書いたの？『ボクがリレーに勝つように』って？

それにあの時聞こえた声は何なの？」

ボクはおじいさんの目を見れなかった。

ボクがおじいさんを責めるようにしか見れないと思ったから。

「そうか・・・。声を聞いたのかい。」

おじいさんはボクの最後の質問だけ少し驚いたようだった。

「ワシはあの時こう書いたんじゃ。

『ケンタくんが今まで努力してきたのを見られているでしょう。

あなたの御心がそれで少しでも動いたのであれば、彼にほんの少しの祝福を。

お願いします、神様。』とな。」

おじいさんは静かな声で話している。

とても、嘘をついているようには見えない。でも・・・

「神様？じゃぁ、あの声は神様だって言うの？」

「そう。このペンは“神様のペン”なんじゃ。

代々受け継がれてきたものでな。ワシで何代目かは知らんがの。

ワシが継いだ時も神様にはお会いしたよ。

そして、ケンタくん。

このペンの力が見える、つまり光が見えるキミはコレを受け継ぐ資格があるということじゃ。」

おじいさんの言葉に体が緊張する。

ボクがおじいさんの、いや、神様のペンを受け継ぐ？

不意にボクの後ろで声がした。

「オレは反対だがな。」

第１３話　神様

誰もいないはずの後ろを振り返ると、２０歳くらいの若いお兄さんが立っていた。

黒の細身のスーツを着ていて、派手さが無い分、見た目の若さを強調しているようだった。

「なぜ、反対なんですかの？」

おじいさんがそのお兄さんに問いかける。

お兄さんはブスッとした顔をして、僕を見下ろして言った。

「こんな子供にペンを継承させるわけにはいかない。

使い方次第では世界を動かすこともできるものだ。

善悪の分別ができる者に渡すべきだ。」

おじいさんは笑顔を崩さなかった。

どうやら今の答えを予想していたようだ。

「ワシが受け継いだときも子供でしたがの。１５歳じゃったか。

それに、このコは純粋です。

ペンを悪用などせんと思います。」

「しかしだな・・・」

「あの！」

お兄さんがさらに何か言おうとしていたが、状況がさっぱり飲み込めないので、僕は口を挟んでしまった。

おじいさんとお兄さんの視線がボクに注がれる。

ボクは少し怖かったけど、お兄さんの目を真っ直ぐに見つめて聞いた。

「あなたは誰ですか？

何でおじいさんが敬語で話しているんですか？」

ボクの質問にお兄さんはヤレヤレというように肩をすくめた。

「話の流れで分からないか？

これだからガキは好きじゃないんだ。」

その言葉にボクがムッとしていると、おじいさんが後ろから説明してくれた。

「この方はペンを作った方、つまり神様じゃよ。

驚いたかの？」

ボクはおじいさんとお兄さんの顔を交互に見比べた。

嘘はついていないようだ。

「こんなに若いヒトが神様なの？

それにすごい普通の格好してるし。」

ボクの言葉におじいさんは声を殺して笑っていた。

不機嫌そうに神様が言う。

「相手を見かけだけで判断するのは馬鹿の証拠だぞ。

それに何を着ようがオレの自由だろう。」

それもそうだ。

でも、神様ってこんなに人間みたいなんだ。

それこそおじいさんの方が神様っぽい。

「そいつは偏見だな。

どれ、証拠を見せてやろうか？」

そういうと神様は右手の人差し指を空中で動かした。

神様の指先からは光が出ていて、指の動きが文字になっていくのがわかった。

“ケンタ宙に浮く”

そう書かれているのが分かった瞬間、ケンタの足はフロアから離れてしまった。

こけそうになるけど、体はどんどん上がっていく。

「うわぁあぁ！」

まるで宇宙飛行士みたいに床から１ｍくらいのところでくるくる回ってしまう。

「わかったかよ、小僧。

オレがペンを創ったってことが。」

神様が指を鳴らすとボクの体はくるっと1回転してふわっと着地した。

ボクは無言で頷いていた。

それを楽しそうに見ていたおじいさんが言った。

「では、継承の儀式にうつるとしましょうかの？」

神様はニヤニヤとしたいやな笑いを引っ込め、真剣な顔でおじいさ

んに聞いた。

「本当にいいんだな？後戻りはできないんだぞ？」

「念を押さなくても大丈夫です。

ワシはケンタくんに会うために今までペンを使ってきた。

そんな気持ちですじゃ。」

ボクにはちっとも話が読めなかった。

「ねぇ、けいしょうって何？

おじいさん、どうかしちゃうの？」

おじいさんはボクに微笑みかけていた。

いつもの眉がちょっと上がった笑顔で。

「ワシの持っている神様のペンをケンタくんに譲る、ということじゃよ。」

「えっ？」

ボクはおじいさんの持っているペンを見つめた。

確かにあのペンはすごい。

使ってみたい。

試してみたい。

・・・・・・・・・・だけど。

・・・・・・・・・・・・だけど。

ボクは考えに考えた。

おじいさんと神様は黙ってボクの答えを待っているようだ。

心なしか神様がボクをとてもやさしい目で見てくれているようだ。

「ボク・・・いらない。」

第１４話　継承

ボクが断ると思っていなかったんだろう。
おじいさんだけじゃなく、神様も驚いていた。
「どうしてじゃ？
すばらしい能力だと思わんかの？」
ボクは首を振り、おじいさんを見つめた。
「すごいと思うよ。
ボクも使ってみたいし、ボクのまわりの皆が幸せになれるんなら
すごく欲しい。」
ボクが神様の方を見ると、さっきまでと違ってやさしい目でボクを
見ていた。
多分、ボクの心を読んだのかな。
「・・・でもね、ボクがそのペンをもらうと、おじいさんはもうペ
ンが使えないんでしょ？
そしたら、おじいさんはもうおばさんに会えなくなるじゃない。」
おじいさんはハッと息を呑んでボクを見た。

そしてボクを抱きしめてくれた。

「ボクはおじいさんにも幸せでいて欲しいんだ。

おじいさんの幸せを奪ってまでペンを使ってみたいとは思わないよ。」

ボクはおじいさんを抱きしめ返した。

広い背中を小刻みに震わせ、おじいさんは泣いていた。

その横でじっと考え事をしていた神様が口を開いた。

「まさか、このオレのペンを持つことを断るやつがいるとはな。

だが、勘違いするな。お前には拒否権はない。

ジジイが望むように、この場でお前にペンを持つ資格を継承させる。」

冷たく言い放った神様はおじいさんの肩を叩き、ボクから引き離した。

「お前の考えはよく分かった。

その心はペンを持つに値するものだ。

ジジイの眼は確かだったな。」

ボクは神様をにらみ、叫んだ。

「ボクはいらない！
おばさんと会えなくなるようなことをおじいさんが本当に望んでるなんて思えない！」
ボクの大声におじいさんは少し驚いていたようだったけど、僕の頭を優しく撫でてくれた。
「ケンタくん、ペンの能力は継承されても残るんじゃよ。
だから、ワシの望むときにケンタくんがペンを貸してくれればいいんじゃ。
それに、ワシはキミがペンを使う姿を見てみたいと思っておる。
そのすばらしい想像力と表現力でどんなものを創り出すのか楽しみなんじゃよ。」
神様も意地悪な顔をして口を挟む。
「そういうことだ。
オレも忙しいんだ。
そろそろ儀式にかからせてもらってもいいかな？」
ボクは自分が必死になっていたことが恥ずかしくなった。
「・・・うん。

そういうことなら・・・。」

ボクは神様の前に立たされ、神様はボクの頭の上に手をかざした。

「・・・汝、美しい言葉を紡ぐ者よ。

先人の指名、ならびに我の認定を受け、汝に世界を綴る力を与えん。

汝、世界の調和を壊さないこと、力を吹聴しないことを誓えるか？」

神様はボクに向かってウィンクした。

ボクはおじいさんが微笑んでゆっくり頷くのを確認して言った。

「誓います。」

その瞬間、ボクにかざしていた神様の手がペンを使ったときのように金色に光った。

光はボクの体を包み、ボクの中に入っていくように消えていった。

「ここに汝をペンの所持者と認め、ペンの使用を許可する。」

ボクは自分の体を見回したけれど、特に何か変わったところは無かった。

「これで終わり？

何か変わったようには思えないんだけど。」

神様はやさしく笑うとボクの頭をくしゃくしゃと撫で回した。

「そのうちわかる。

ペンを使ってみればな。」

おじいさんもボクの背中をさすりながら、やさしく微笑んでいる。

「ゆっくり自分の望むこと、叶えたいと思うことを考えるといいよ。

時間は逃げないのだから。」

急にやさしくなった神様とずっとやさしいおじいさんを見比べて、ボクはゆっくり頷いた。

ボクはおじいさんにペンを差し出した。

「今すぐ“望み”が思い浮かばないから、おじいさんが預かっててくれない？

無くしちゃうと大変だし、ボクはおじいさんにはしょっちゅう会

いに来るし。」

おじいさんもボクがそういうのを分かっていたようだ。

ペンを受け取り、机の中にしまった。

それを確認した神様が大きく伸びをした。

「さて、オレはそろそろ帰るかな。

こう見えても案外忙しい身なんでな。」

神様はそういうと携帯電話を取り出し、どこかへ電話をかけだした。

「もしもし、アイちゃん？これから行くよ。

ああ、もちろんだよ。何でも買ってあげる。」

ボクはもう2度と神様に祈ることはしないでおこう。

すごく無駄なことだと思うから。

神様は電話を切ると、頭の上に指で円を書いた。

「ケンタ、今日会った記念にコレをやろう。」

神様は上着の内ポケットから親指くらいの大きさの小瓶を取り出し、

ボクに向かって投げた。

ボクは何とかキャッチした。小瓶の中には黒い液体が入っていた。

「それはペンのインクだ。ジジイと会えないときに使え。
ペンと同じ効果が出せるから。」
じゃあな、と言って神様は円の中に入っていった。
「ありがとう！・・・神様。」
どんどん円に入っていたので、ボクは神様の足にお礼を言っていた。
「ホッホッ、ずいぶん気に入られたようじゃの。」
「そうなのかな？
変わったヒトだけど、根は優しいのかもね。」

ボクはおじいさんにまた別の日に寄ると伝え、家に帰っていた。
家までの道のりを歩きながら、おじいさんの家での出来事を考えていた。
『本当に夢みたいな話だな。
ナオちゃんやママに言っても信じないだろうな。
神様のペン・・・神様のペン・・・

ボクの“望み”ってなんだろう？

まだまだボクには必要ないかもね。』

第１５話　つかの間の平和

ボクがおじいさんから“ペンの力”を受け継いでから１ヶ月近くたった。

夏の暑さを残していた季節が去り、通学路の並木道は黄色や赤に色づき始めている。

ボクはあれから力を使っていない。

望みについて必死に考えてみたけど、今のボクは十分幸せだから、特に叶えたいことも無いんだ。

おじいさんはボクにペンを使わせようとするけど、ボクはマイペースでかわしていく。

そのうち、必ず使うことがある。

感動はそのときまで取っておきたい。

今日もボクは平和な日常を過ごしていた。

学校の休憩時間にクラスの皆はおしゃべりや次の授業の準備などしているけど、

ボクは今度の朗読会のために、おじいさんから本を借りて読んでいる。

もう何度目になるのかな？

メンバーも増えてきた。

おじいさん、ナオちゃん、ママにサトおばさん。

この間はおじいさんの小説の編集のおじさんまで参加した。

やっぱりまだ緊張するけど、皆が喜んでくれるのでもっとうまく読めるようになりたい。

「よ～し、席につけぃ。」

杉田先生がちょっとテンション高めで入ってきた。

皆がのろのろと席につきだす。

「よしよし。この時間は授業をやめて、一ヵ月後の『文芸会』の出し物を決めるぞ。」

ボクの学校では12月の最初のほうに文芸会というものをする。

何でも運動会があるのだから、文芸会もあってもいいんじゃないか？という校長の思いつきで始まったそうだ。

「え～面倒だなぁ。」

「何でもいいよ、そんなの。」

「もう先生が何かやったら？」

運動会の団結はどこへやら。クラス中からブーイングが聞こえる。

まぁ、ボクは適当に決めてくれさえすれば反対はしない。

だから、この時間は本の続きを読もう。

「ちなみに今回は最優秀クラスには豪華商品がでるぞ！」

ザワザワザワ

皆が真剣な顔で何をするか考え出した。

現金だなぁ。期待しすぎると痛い目にあいそうだけどなぁ。

「先生！」

ビシッと手が挙がる。

本から目をあげるとナオちゃんが背筋をピンと伸ばして立ち上がっていた。

「演劇がいいんじゃないでしょうか？歌とか地域研究はありきたりだし。」

ああ、それは面白いかもしれない。さすがはナオちゃんだな。

「おぉ、それでどんな劇にするか、決めてるのか？」

ナオちゃんは口の端をあげて不敵な笑みをもらしながら、ゆっくりボクのほうに振り返る。

ゾクッと悪寒が走る。まさか・・・

「ケンタくんが脚本を考えてくれます！」

いやな予感が的中だよ。

平和な日常よ、さようなら・・・。

第１６話　隠れた恋心

すべての授業が終わり、放課後になって、皆が帰っていく。

ボクは自分の席でペンを走らせていた。

我がクラスのリーダー、ナオちゃんの提案に反対意見が出ず（もちろんボクの発言はナオちゃんの眼力により、撃ち落された）、劇の脚本を執筆中だ。

案外一度書き出すと次から次に物語が浮かんでくる。

劇の所要時間は１５分なので、難しいお話にはできない。

低学年の子も見るので、小さな子が好きそうな物語にするのがポイントだ。

「やっぱり、王子様がお姫様を助ける物語が王道よね。」

ボクが顔を上げると、前の席の背もたれを抱くようにナオちゃんが座っていた。

「あれ？帰らなかったの？」

ボクが聞くと、ナオちゃんはボクのノートに目を落としたまま言った。

「一番大変な仕事をケンタくんにだけさせて帰れないよ。

ねぇ、ワタシにできること無い？」

ボクは少しだけ考えて首を振った。

「今は大丈夫だよ。

ただ、キャスティングはボクが決めるから、お芝居のほうで頑張ってもらうことになると思うよ。」

ボクの言葉を聞いて、ナオちゃんは目を見開いた。

「ワ、ワタシが演技するの？

通行人とかの役なんでしょ？」

「まだ内緒。反対は無しだよ。

ボクのイメージで配役を決めるから。」

ボクは意地悪な笑顔をしているんだろう。

ナオちゃんが困ったような顔でボクを覗き込んでくる。

・・・顔が近い。

ボクらは１０ｃｍくらいの距離のお互いの目を見つめていた。

可愛いな。そういえば、ナオちゃんは人気があるって、リョウちゃ

んが言ってたな。

「・・・あ、明日には配役を発表できると思うよ。

今日はおじいさんのとこに行って、感想を聞くつもりなんだ。」

沈黙が恥ずかしくなって、しどろもどろに言った。

顔が熱い。多分、真っ赤になってるだろう。

「そ、そう。それじゃ、明日を楽しみにしてるね。」

ナオちゃんは勢いよく立ち上がると、そそくさと教室を出て行った。

心なしか顔が赤かったような気がする。

ボクはボーっとナオちゃんを見送ったあと、物語を完成させておじいさんの家に向かった。

「ふむ、面白い作品じゃな。

初めてにしてはよく書けておるよ。」

おじいさんが物語を読んでから、ボクに目を向けて言った。

ボクはその言葉に安堵してため息が出た。

「良かった。

結構自信作だったから、ダメだって言われたらどうしようかと思った。」

おじいさんは笑っていた。

「とても気持ちのこもったいい作品じゃと思うよ。

この主人公のお姫様はナオちゃんがやるんじゃろ？

すると、こっちの騎士役はケンタくんかの？」

「いや、ボクは出ないよ。

ただ、騎士の役は正直悩んでるんだ。

イメージにぴったりのヒトがいなくてさ。」

それから、小1時間ほどおじいさんと相談して、脚本を直した。

窓の外が薄暗くなってきたので、おじいさんにお礼を言って家に帰ることにした。

「おじいさん、ありがとう。

もし良かったら、文芸会も見に来てね。」

おじいさんは笑顔で見送ってくれた。

明日が楽しみだな。

ケンタを見送ったおじいさんがレオを撫でる。

「アレはなかなかのラブレターじゃな。

ケンタくんは気づいておらんようじゃが、お姫様への気持ちがあふれんばかりじゃった。」

レオはうれしそうに鳴くとおじいさんの横に寝そべった。

第１７話　放課後

楽しみなことがあとに待っていると時間はすぐに経ってしまうんだろうか？

授業はあっという間に終わり、ＨＲの時間になった。

皆の視線を受けながらボクは教壇の前に立つ。

「え～と、昨日あれから劇のシナリオを考えたんで、これから話の流れを説明します。

そのあと、配役を発表するから、皆大まかな流れは聞いておいてね。」

そういってボクは持っていたノートを開いた。

舞台は中世のヨーロッパ。

『とある国のお姫様が隣国訪問中に行方不明に・・・。

お姫様を探して方々を旅する主人公の騎士。

旅先で協力して、困難を乗り越える仲間。

ついにお姫様が敵対国の囚われているとつきとめ

敵対国に乗り込む主人公たち。

そこで待ち受けていたものとは・・・・！？『

番外編『ケンタの処女作　～姫を探して～』を執筆予定です。

詳しい内容はそちらで・・・・。

「・・・てな感じです。

舞台は中世だし、アクションもあるから大変かもしれないけど

どうかな？」

一瞬の静寂にボクの喉が鳴る。

・・・パチパチ

どこからか拍手が聞こえたと思ったら、皆の歓声が上がった。

「すごくいいよ！」

「ケンタ、やるじゃん。」

「面白い！やってみようよ！！」

皆の反応にボクが驚いていると、ナオちゃんが親指をボクに向かって立ててていた。

ボクはうれしくなった。

ボクの書いた物語が皆に喜んでもらえたんだから。

「よっし！じゃぁ、配役も決めていくよ。

一応ボクのイメージで決めたヒトを書いていくから

もし、他のヒトのほうが適任だと思ったら言ってね。」

ボクは黒板に役名とクラスの皆の名前を書いていく。

驚きや悲鳴が聞こえる。

お姫様の役はやっぱりナオちゃん。

敵対国の王様にはリョウちゃん。

仲間や通行人などどんどん書いていって

最後に主人公の騎士役にタツヤくん。

ボクのクラスで一番イケメンだ。

騎士の格好が似合うだろう。

ボクはすべての役と名前を書き終わると皆を見渡して一呼吸おいた。
皆特に反対意見はないようだ。
「それじゃ、納得してもらったみたいだからそれぞれの役には台本を渡します。
名前の無い皆はセットや衣装を作りましょう。
良い作品になるかはこれからの頑張り次第だから皆で精一杯やって豪華景品もらおう！」
「「おぉ～～っ！！」」
運動会以来の一致団結。
ホントに現金なクラスメイトだ。扱いやすい。

ＨＲも終わり、各担当に指示を出してその場は解散になった。
ボクはクラスで一番オシャレなカナちゃんと絵が一番上手いシンちゃんとセットや衣装のデザインを考えていた。
他にも残ってセリフを覚えたり、小道具をどこでそろえるか相談したりするヒトも何人か残っていた。
横からタツヤくんの声が聞こえてきた。

「ねぇ、ナオちゃん。明日休みだし、一緒にセリフ合わせしない？」
メモをしていたボクの鉛筆がポキッと折れてしまった。
「あらら、ナオはやっぱりモテモテだねぇ。」
とカナちゃん。
ボクが不思議そうに見るとシンちゃんが
「お前知らなかったの？
うちの学年だけでも5人には告られてるらしいよ。
・・・どうするんだ？」
と心配そうにボクを見る。
「ど、どうって、何が？」
ボクは鉛筆を削り、セットのデザインの続きを書く。
ナオちゃんの返事を聞くために、耳に全神経を集中させながら。
「ごめんね。
ワタシ、一人のほうが集中出来るから。
覚えたら、セリフ合わせましょ？」

ほうっとため息をもらしてしょんぼりしながら帰るタツヤくんの背中を見つめた。

二人に振り返ると、意地の悪そうな笑顔でボクを見ていた。

「何見てんの！さっさとデザインを決めてしまおう。」

ふとシンちゃんの視線がボクの後ろを見ているのに気づいてまた振り返る。

ナオちゃんがそこにいた。

「ケンタくん・・・今日中にセリフ覚えるからさ。

明日練習の成果見てくれない？」

ボクから視線をはずしていたけど、ボクの名前を呼んだよな？

「え、あ、うん。モチロンいいよ。」

パッとナオちゃんの顔が明るくなった。

「ホント！？じゃぁ、広井公園に１０時ね。

また、明日！」

走って教室を出て行くナオちゃんの後姿を呆然と見送った。

ボクは耳まで赤いんだと思う。

ボクを見ている二人の顔がさっきの倍は意地が悪そうだからだ。

ボクがにらむとそそくさと考えるふりをしだした。

「明日は天気がいいから、紅葉狩りも楽しそうだよねぇ。」

カナちゃんが何気なくもらす。

ボクは咳払いをして二人を見比べた。

「明日、どんな格好していけばいいと思う？」

第１８話　初デート

空は見事に晴れていた。

秋も深まって空が少し低くなった気がする。

ボクはナオちゃんと約束した時間より３０分も前に広井公園に着いていた。

いや、決して緊張して眠れなかったとかじゃないから！

悩んだ服装もジーンズに黒のＴシャツ、グレーのシャツと大人しめにまとめた。

黒のキャップを目深にかぶっているのには訳があった。

今朝、早々に家を出ようとしたときだった。

「どこに行くの？」

玄関で靴を履くボクの背後にママが立っていた。

何故だろう、ニヤニヤしてるんだけど。

「えーっと、シンちゃんと遊びに行くんだ。」

ママはますますにやけ顔を全開にしている。
あれ？もしかしてバレてる？
「ママねぇ、昨日仕事の帰りにシンちゃんに偶然会っちゃったんだよね。
そしたら、シンちゃん何を教えてくれたと・・・」
「行ってきます！」
ママが言い終わる前にダッシュで外に出る。
ドアを開けてすぐのところで誰かにぶつかった。
「ごめんなさい。ってあれ？おじいさん、どうしたの？」
ボクがぶつかったのはおじいさんだった。
レオの散歩の途中なのかな？
「おお、ケンタくん。大丈夫かの？
ほっほっ、今日はナオちゃんとデートじゃろ？
慌てていると失敗の元じゃぞ。」
ボクが口をパクパクさせているとおじいさんは会釈をした。

つまり、ボクの後ろに・・・

「ワタシが連絡したのよ。

今日はいい天気になるから、レオの散歩をご一緒させてもらえませんか？ってね。」

あとをつける気だな。スカートを穿くことが多いママが今日はジョギングパンツだ。

ボクがママをどう撒くか考えていると、おじいさんがこっそり僕に言った。

「ちょっとのぞいたら、すぐ帰るよう言っておくから安心しなさい。

それより、これを持って行きなさい。

何があるか分からんからの。」

そう言っておじいさんはママに見えないように『神様のペン』を渡してくれた。

「おじいさん、ありがとう。

行ってきます。」

朝からこんなことがあったので、ボクは内心ドキドキしていた。

他にもこの情報が漏れているんじゃないか。

ま、いいか。

別に隠すようなことじゃないし。

ナオちゃんとはしょっちゅう一緒にいるんだから。

変に意識せずにいつも通りにしよう。

ボクは公園のベンチに腰掛けた。

「お待たせ、ケンタくん。」

後ろから声を掛けられて、振り返る。

そこにいたナオちゃんはなんだかいつも通りじゃなかった。

いつもポニーテールにしていた髪をおろした黒髪がサラサラと風に揺れている。

淡いピンクのワンピースと同じ色のカチューシャがとてもよく似合っていた。

「どうしたの？ケンタくん」

「あ、いや。

いつもと感じが違うから、ちょっと驚いただけだよ。」

ボクは心臓の鼓動がだんだん早くなっているのを感じた。

「似合わないかなぁ？」

ナオちゃんがワンピースの裾を掴んで自分の服装をチェックする。

「そんなことないよ。

その・・・カワイイよ。」

ボクらは顔を真っ赤にしたまま5分ほどその場に立ち尽くしていた。

「へぇ、ケンタも言うねぇ。」

ベンチから２０ｍほど離れた草むらで二人をうかがう人影。

「ナオも大分頑張ってるわね。あの子がワンピースなんて見たことないわ。」

今回の情報の発信源、シンゴとカナだった。

なぜ、二人がここにいるかというと

「やっぱり心配なのよねぇ。」

「面白そうだからな。」

ボクらはベンチから公園の中に流れてる川の近くに場所を移して台本の読み合わせをすることにした。

ナオちゃんがお姫様役を、ボクがその他全般だ。

ナオちゃんは台本を片手に演技をする。

すごく練習したんだろうな、動きがスムーズだ。

「あっ、そこはさ。もっと高飛車な感じのほうがいいよ。

こう心配する騎士に有無を言わせないような。」

「そう？こんな感じかな。

控えなさい！私を誰だと思っているの！？」

「そうそう、すごく上手だよ。」

「楽しそうね。」

「そうじゃのう、よかったわい。」

「ワフ」

シンゴたちとは少し離れた草むらにいるのは、もちろんケンタのママ、カオリとおじいさん、それにレオだった。

「あの子にあんなにカワイイ彼女が出来るなんて・・・ウゥ。」
「いや、カオリさん。感極まるのは早いんじゃないかの？
ケンタくんはまだ１０歳じゃし、友達の延長じゃろう。」
涙ぐむカオリの背中をおじいさんは優しくさすってあげていた。
「いいえ、あの子は活発なほうじゃないし。
今を逃すと彼女なんて出来ないかもしれない。
頑張ってもらわないと！」
ワタシの老後がとか、嫁に来たらとかカオリがつぶやいている。
ていうか、すぐ帰るんじゃないのか。
「それは言葉のあやじゃよ。ケンタくんが安心すればそれだけ尾行しやすいじゃろ。」
あの、ナレーションと会話しないでください。
「ワシはなんでもありじゃ。」
はぁ、話を戻そう。

一通り終わって、ナオちゃんが芝生の上に寝転がった。

「すごいよ、よく練習したんだね。

演技もばっちりだったよ。」

ボクが褒めるとナオちゃんは目を輝かせた。

「ホント？よかった。

ケンタくんのお話を台無しにしちゃいけないって思ってたから。」

耳のあたりが熱くなる。

「えっと、そろそろお昼にしようか？

ナオちゃん、何が食べたい？」

ボクが話題を変えてそういうと、ナオちゃんは持っていたバッグから包みを取り出した。

「実はね、お弁当作ってきたの。

運動会の時に食べてもらえなかったから、頑張っちゃった。」

血の気が引いていくような気がした。

今日のボクの顔は面白いくらい色が変わっているんだろうな。

第１９話　殺人兵器再び！？

ボクはいやな汗を全身から噴き出させている。

目の前にはリーサルウェポン（手作り弁当）を持ったナオちゃん。

後ろにはちょうどボクらに日陰をつくっている大木が。

に・・・逃げ場がない。

ボクが活路を探していると、ナオちゃんがボクの顔を覗き込んでくる。

「ケンタくん？

もしかして、サンドイッチ好きじゃなかった？」

可愛いな、ナオちゃん。

・・・いやいやいや、そうじゃない。

ここはサンドイッチがダメと嘘を通すか？

「あ、この前給食のカツサンド美味しそうに食べてたもんね。

大丈夫。このカツサンド、すっごく自信作なの！」

ハイ、消えた！

どうする？まだお腹すいてないことにするか？

いや、時間伸ばしても一緒だし・・・。

何より食べないとナオちゃんが傷つくよな。

ここは覚悟を決めて！

・・・

・・・

・・・

食えねぇ。

たしか杉田先生、運動会の後1週間食あたりで休んだんだよ。

どうする？どうすんだよ、ボク！

「あれはまずいな。何とかしないと。」

草むらではシンゴたちがあせっていた。

「このままじゃ、せっかくのデートでケンタがデリートされちゃうわよ。」

カナは案外余裕があるようだ。

「えっ、ナオちゃんって料理ダメなの？」

「そうなんじゃよ。

人間誰しも欠点はあるもんじゃ。」

いつの間にか野次馬たちは合流していた。

「完璧な女の子より、ちょっと不得意分野があるほうが可愛らしいものね。

さすがね、ナオちゃん。」

「いや、ケンタのママ。

あれはそんなにやさしいモンじゃねぇっすよ。」

カオリの平和な発言にシンゴが思わずツッコミをいれる。

「さて、どうするかの？

こうしておってもケンタくんのピンチは変わらんし・・・。

ん？」

おじいさんの視線の先には大あくびをするレオの姿があった。

「そうじゃ！

レオが突入すれば大丈夫じゃよ。」

「「えっ！」」

「レオはこと体に関しては丈夫じゃから、ナオちゃんの弁当の１つや２つものともせんわい。」

おじいさんは自信満々だったが、突然の指名に当のレオは声が出ないほど驚いていた。

「さぁ、友達を助けるためじゃ。

逝ってこい、レオ！」

「行くだろ！？

このじいさん、大丈夫か？」

シンゴのツッコミを他所に、レオは決心したのか涙を流しながらケンタとナオミの方へダッシュしていった。

しかし、ケンタたちまでは１００ｍ以上離れている茂みで覗いていたため、間に合うかどうかギリギリのところだ。

「はい、ケンタくん。

あ～ん。」

ナオちゃんは満面の笑みでボクにカツサンドを差し出す。

こんなに嬉しくない『あ～ん』は初めてだ。

覚悟を決めよう！

そのとき、ボクのポケットで尖った何かが動いた。

そうだ！ペンの力を使って、カツサンドを美味しくすればいいんじゃないか？

そうすればすべてがうまくいく。

最初の望みがこんなことで正直ガッカリだけど背に腹はかえられない。

そう考えてポケットの中のペンを握った。

・・・いや

やめとこう。

それはさすがにナオちゃんに失礼だ。

この力は本当に必要になるとき、誰かを助けるときに使うんだ！

ボクはナオちゃんを真っ直ぐ見つめて恐怖を隠すように笑った。

「いただきます。」

勢いよくカツサンドにかぶりつく。

・・・・・・

ん？

「美味しい。」

予想外の味に、ボクは半分呆然となりながら感想を言った。

「ほんと！？よかった。

最近ずっと料理の練習してたんだ。」

「ナオちゃん・・・」

ボクはナオちゃんの健気な姿に感動した。

嬉しくて抱きしめたくなった。

「ナオちゃん、ありがグフォッ！」

突然横から何か大きなものが激突し、ボクは２ｍくらい吹っ飛ばされた。

わき腹を押さえながら、振り返るとそこには白い大きな犬が息を切らしてながら、ボクを見ている。

「あら、レオ。

どうしたの、お散歩？」

レオはナオちゃんの足元へ首をすり寄せ、撫でて欲しいとねだっていた。

ボクは混乱した頭をクールダウンさせ、状況を考える。

「ボクのわき腹に突進してきたのはレオか。

ということは、もちろん・・・」

ボクはレオが走ってきた方を振り返ってにらみつける。

茂みがガサッと音を立て、中から考えていた通りの人物たちが姿を見せる。

心なしか皆気まずそうな表情をしている。

「さて、なんとなく答えは分かってるけど、一応聞いておこうか。

何でここにいるの？」

４人は並んで体育座りをしている。

「ワシはレオの散歩の途中でのう。」とおじいさん。

「お前がちゃんとやってるか心配だったんだよ。」とシンちゃん。

「アタシ、暇なのよね。」とカナちゃん。

「ケンちゃん、グッジョブ！」これはママ。バッチリ親指を立てている。

「反省の言葉はないのかよ！」

４人の自由な発言についつっこんでしまった。

それから１０分ほど並んでいる４人に対してのボクの説教が続いていたが、

「ねぇ、お腹すいたからそろそろ皆でお昼にしましょ？」

レオと遊び飽きたナオちゃんの言葉で、雰囲気がガラッとピクニックへと変わってしまった。

人を和ませる、いや、人の心を掴む人徳がナオちゃんの一番のいいところなんだな。

皆でカツサンドを賞味したあと、おじいさんはレオの散歩の続きに、ママは夕飯の買い物に行った。

残ったのはボクとナオちゃん、シンちゃんにカナちゃん。

４人で広井公園をブラブラと紅葉狩りをすることにした。

「安心しろよ。

カナを連れて適当なところで消えてやるから。」

シンちゃんが僕の肩に手を置いて言う。

そんなに落ち込んで見えたかな？

「大丈夫だよ。

今日はもう十分すぎるくらいナオちゃんのいいところを知れたから。

これ以上を望むのと神様に贅沢言うなって怒られるよ。」

あの神様なら怒りはしないだろうけど、めんどくさそうにはするだろうな。

ボクの口ぶりがツボに入ったのか、シンちゃんは声を出さずに笑っていた。

少し歩いて、真っ赤に紅葉した紅葉の並木道に進んだ。

燃えるような紅色に皆言葉もなく木々を見上げていた。

「すごくキレイだね。

初めてじっくり見るけど、絵とか写真の世界みたい。」

いつの間にかボクの隣に来ていたナオちゃんが感想をもらす。

そんなナオちゃんの横顔に見とれてしまい、上手く返事が返せなかった。

ボクに振り返って、不思議そうな表情をしたので、慌ててしまう。

「いや、そんな世界だったら、ナオちゃんによく似合うなって思ってさ。

今とっても溶け込んでたよ。」

褒めたのかよく分からないボクの言葉に、何それと言いながら、風でくるくると飛んでくる紅葉の葉と踊るようにはしゃいでいた。

「ケンタくん、来年も再来年も観にこようね。」

ナオちゃんのふとした言葉にボクの頬が緩む。

「そうだね。

こんなにきれいな景色をナオちゃんと一緒に観られると思うと今から楽しみだよ。」

ボクらのやりとりを見ていたシンちゃんとカナちゃんは少し恥ずかしそうにしていた。

シンちゃんが近づいてきて、ボクに耳打ちする。

「ケンタ、今の会話はほとんど告白みたいなモンだぞ。」

「そんなんじゃ・・・」

ボクは慌てたけど、風に乗って紅葉と踊るナオちゃんの姿はさっきの台詞なんて気にしていないようだった。

ボクは自分の顔が紅葉と同じくらい紅くなっているだろうと、帽子を深くかぶりなおし、恥ずかしさに耐えていた。

月曜からどんな顔して学校に行けばいいんだろうか。

「ちゃんと告ッちまえばいいだろうが。」

シンちゃんの言葉が心に刺さる。

告白か。

劇が一段楽したら考えてみよう。

第２０話　演劇の奇跡～前編～

ボクは教壇の前に立っていた。

クラスの皆はそれぞれ席についてボクが話し出すのをじっと待っている。

「何日も前からつらい練習や準備に皆が奮闘してくれたのは分かってる。

疲れもピークに達しているだろう。

単純なミスも仕方ないと思う。」

みんなの前をコツコツと歩き回る。

文芸会前日の今日、体育館で通して練習した最後のミーティングだ。

皆緊張した顔をしている。

杉田先生なんかなぜか肩を震わせながら、ボクに土下座している。

まぁ、ほっとくけど。

「そんな皆のコンディションも分かるが、今日の劇を見た限り完成度は・・・」

ゴクッと生唾を飲み込む音が聞こえる。杉田先生だ。いや、あんた何にもしてないから。

「予想以上に最高だ！」

「「おおぉぉ～～！！」」

ボクの叫びにクラス中から地響きのような雄たけびがあがる。

「いいか、皆！

油断するな！今日が良かったからといって、明日ハプニングが起きないとも限らない！

今日は各自明日の仕事の簡単な復習のみとして、早めに休息を取ること！！

いいな！？」

「「いえっさー！」」

「よし、解散！」

ぞろぞろと帰り支度をする皆をみて、改めて思う。

こんなにノリが良かったんだな、このクラス。

ボクも案外毒されてきたのかもしれないな。

いつまでも飛び跳ねている杉田先生のお尻にタイキックをお見舞いして帰り支度をしていると、ナオちゃんがとびきりの笑顔でボクに話しかけてきた。

「ねぇ、ケンタくん。
実はお願いがあるんだけど・・・いいかな？」
「どうしたの？」
クラスの皆には聞かれたくないのか、ボクの手を引っ張って屋上まで連れてきた。
なんだかドキドキするな、この間の紅葉狩り以降ゆっくり話す機会がなかったから。
「実はね。
・・・劇のことなんだけど。」
そっか、そうだよな。今は劇のことで頭いっぱいだよね。・・・はぁ。
「ラストのシーンなんだけど、・・・どうしたの？」
「い、いや。何でもないよ。
ラストがどうしたの？」
ごまかし笑いを浮かべながら、話を戻す。
「あんなに勝気で向上心の高いお姫様が騎士と対面したら、普通の

女の子みたいに抱きつくじゃない？

何だか納得がいかなくなっちゃって。」

「う～ん、確かにそうだなぁ。

なるべくハッピーエンドにしようと思ってたんだけど、確かにキャラが変わってるかもね。」

まじめな話になったので、ボクも本気モードに入る。

物語のラストシーンでは、お姫様を探して旅をしている間に大陸一強くなる騎士と行方不明の間に大陸一の大国を征服したお姫様が再開し、二人は結ばれることになっている。

「それでね、二人が再開したときに・・・」

ナオちゃんがひそひそとボクに耳打ちをする。

「・・・てのは、どうかしら？」

「うん、面白いよ！

派手なラストシーンに出来そうだし、斬新でインパクトもバッチリだ。

さっそく皆に連絡しよう！」

走って教室に戻ろうとするボクをナオちゃんが腕を掴んで止める。

「ワタシとケンタくんと二人でドッキリラストにしてみない？
皆に内緒にして。」
意地悪な顔をしたナオちゃんがそこにいた。
ボクは一生ナオちゃんの敵に回るようなことはしないでおこう。ひざの震えが止まらない。
「わ、わかったよ。でも、音響のカナちゃんと照明のシンちゃんには言っておかないと。
効果的な演出がいるからね。」
「そっか～。
でも、あの二人は口が堅そうだから、大丈夫かな？ワタシ、言っとくね。」
そういってナオちゃんは屋上から降りていった。
何か企んでる、それでいてとても楽しそうな顔のナオちゃんを止めることは今のボクにはできなかった。

さぁ、一夜明けて、いよいよ文芸会当日。
ボクのクラスは午後から体育館を使っての演劇のため、午前中から準備で皆バタバタと動き回っていた。

脚本兼監督のボクは当日になってしまえばもうする事はほとんどないので、1人でまったりと本を読んでいる。

しかし、今年の文芸会は今まで以上の盛り上がりを感じる。

やはり豪華商品が聞いているのか、各クラスの意気込みも半端ではない。

校門の近くでジャグリングやファイアーダンスをしていた6年生もいた。

ま、先生に見つかって怒られてたけど。

ダダダッと廊下を走る音が響く。

おかしいな、この階のクラスは出し物があるから、うちのクラスも含めて準備でどこかに出てるはずなんだけど。

「ケンタ！やっと見つけた。

やばいんだよ。どうしよう！」

教室のドアを勢いよく開けて叫んでいるのはリョウちゃんだった。

「落ち着きなって。

もうすぐ本番だろ？

早く準備をしなよ。」

「いいから来いよ！」

ボクは無理やりに腕を引っ張られる。

皆の緊張でもほぐしてもらいたいのかな？

体育館はボクのクラスの劇を楽しみにしてきた人たちで溢れていた。

そして、開始時間になっても始まらないことにざわざわとどよめきがし始めていた。

そんな騒ぎも耳に入らないボクは呆然と立っている。

その場所は体育館の音響室。

体育館に流す音楽やマイクの音量なんかを調節する部屋だ。

もうその役割を果たせないのは一目見て明らかだった。

機材がビショビショになっているんだ。うんともすんともいわない。

「誰がこんなことを。」

「さっきD組のヤツが出てくるのを見た。

あいつら、オレたちに商品を持っていかれたくないからこんなことを！」

タクちゃんが怒りに震えながら言った。
確かにボクらの演劇は前評判が高かったけど、ここまでするとは豪華商品って一体・・・？
「ん？ケンタ、知らなかったのか？
商品ってＵＭＪの１年間フリーパスだって話だぞ。」
なんだって！？国内屈指の大型アミューズメントパークのフリーパスだったのか！
これは負けるわけにはいかないな。
ナオちゃんをデートに誘うのに、何の気兼ねもなしに誘える神のチケットを手に入れなければ！
「・・・ケンタ。
さっきから全部声に出てるぞ。
不純な闘志を燃やしやがって。」
ボクが慌てて周りを見渡すと、しらけた顔が並んでいた。
「っおほん。
とにかく、ここはボクに任せて！

皆は本番の準備を続けて。

音響の係だったシンちゃんとタクちゃんは、照明と大道具を手伝って！」

ボクの剣幕に皆背筋を伸ばして持ち場へ向かった。

残ったボクはだめもとで機材のスイッチを動かしてみる。

「やっぱりダメか。

なら、仕方ない。」

ボクはズボンのポケットから万年筆を取り出した。

黒地に羽の模様が入っているペンで、茶色くくすんでいてよく使い込まれているのがすぐに分かる。

そう、おじいさんのペンだ。

ボクは皆ががんばってきたことをよく知っている。

その皆の劇をこんな卑劣な妨害のために中止になんてできない。

決して商品に釣られたわけじゃないからね！

さぁ、やるぞ！

ボクは深呼吸して、ペンを何もない空間に走らせる。

『クラスの皆に僕の声が聞こえるようになる』

空中に書かれた文字は、すぐに黄金色に輝き、消えていった。

「皆、準備はいいかい？」

どこから聞こえたのか、ボクの声に戸惑いながら、皆の返事が聞こえる。

「じゃぁ、はじめるよ！」

ボクがペンを走らせると、体育館に演劇開始を伝えるイントロが流れ始めた。

もう一度深呼吸し、ボクは話し始める。

「大変長らくお待たせいたしました。

これより、４年Ｂ組による演劇“姫を探して”を上演いたします。」

大声で騒いでいたお客さんたちも静まり、静かにステージに集中する。

ボクは夢中でペンを走らせる。

平和な音楽が流れ、照明がステージを照らす。

さぁ頑張ろう、皆！

そう、ボクはペンの力で音をつくり、体育館中の人に届かせている。

１秒の遅れも許されない音楽や効果音。

ボクは夢中で空間に光を躍らせる。

皆が頑張ってきた劇を必ず成功させるんだ！

第２１話　演劇の奇跡～姫を探して～（前書き）

第２１話は演劇の内容です。
本編で大幅に演劇に触れることになりましたので、急遽作中で登場させました。
一応前後で関係ある話ですので、読み飛ばさないようお願いします。

第２１話　演劇の奇跡～姫を探して～

遠い遠い昔のお話。

キャンデルという小さな国がありました。

キャンデル国はステラという１人のお姫様が治めていました。

ステラ姫はとても美しく、聡明、そして活発な人でした。

馬で国中を駆け巡っては的確な指示を出します。

「東の沼地を耕しましょう。来年には立派な農地になるわ。」

「城と港町を結ぶ中間に宿場をつくるわ。他国との貿易がもっと盛んになるはずよ。」

「軍をもっと強固にしないと。他国からの侵略から民を守るのよ。」

ステラ姫のおかげでキャンデル国はどんどん豊かになりました。

ただ城の皆は１つだけ困ったことがありました。

ステラ姫は護衛をつけることを極端に嫌っていたのです。

「じゃあ、行ってくるわね。」

ステラ姫が馬に乗って出かけようとしたとき、騎士団長のマルスが呼び止めます。

「姫様、どうか護衛をつけてください。

キャンデル国は豊かになりましたが、どこで危険があるかわかりません。」

ステラ姫はその青く澄んだ瞳でマルスをにらみます。

「そんなことに大事な騎士たちの時間は割けないわ。

それにワタシに剣で勝てる人なんていないでしょ。

なら、護衛をつける意味なんてないじゃない。」

マルスもこれには何も言い返せません。

事実、ステラ姫は騎士団長を務めるマルスでさえ、１０回勝負して１回勝てるかどうかの剣の腕前。

ステラ姫はマルスの様子に勝ち誇った顔を浮かべると、そのまま輝く黄金色の髪をなびかせ、城下へ、その先の国中の土地へと馬を走らせていきました。

しかし、姫が城へ帰ってくることはありませんでした。

何日待ってもステラ姫が帰ってくる気配はありません。

マルスや城の騎士たちが国中を探しましたが、どこにもステラ姫は見当たりません。

皆が途方にくれているとき、マルスは城下町で1人の旅人が話しているのを聞きました。

「東の森で金髪のえらい美人とすれ違ったよ。

何かを探してるみたいだった。」

聞くやいなや、マルスはキャンデル国で最も速い馬を駆り、東の森へと向かいました。

最近、森には盗賊団が現れると噂です。

ステラ姫の身を案じ、マルスは森の盗賊団のアジトへたった1人で攻め込みます。

「我が名はマルス！

貴様らに問う。ここ数日で金髪の女を襲ったか！？

質問に答えねば、貴様ら全員オレの剣の錆にしてくれる！」

突然の詰問に、盗賊の頭は大声で笑いました。

「立派な鎧の騎士が訳のわからねえことをほざいてやがる。

野郎ども！この馬鹿を痛めつけてやれ！」

一斉に襲い掛かってくる盗賊たち。

しかし、毎日ステラ姫を守るためと鍛錬を欠かさないマルスの剣技はキャンデル国において1、2を争う腕前でした。

次々と盗賊たちを切り払い、倒していきました。

「ま、まいった。俺たちの負けだ。命だけは助けてくれ。」

マルスの実力を知り、勝てないとみるや、盗賊の頭は剣を捨て命乞いをしました。

マルスは剣を鞘に収め、盗賊の頭の前で頭を下げました。

「オレこそいきなり疑って悪かった。

実はわが国の姫を探している。

金の輝く髪に澄んだ青い目をしている。

誰か見た者はいないだろうか？」

盗賊たちは皆それぞれに顔を見合わせますが、ステラ姫の姿を見た者はいないようです。

そんな中、盗賊の頭は皆に顔を向けました。

「よし！お前ら、ひとっ走りして情報集めてきな！」

「ヘイ！」

盗賊たちはそれぞれ馬に乗り、四方八方へ走り出しました。

「兄さん、ちょっと待ってな。

半日もあれば、目撃情報のひとつでも届けてやれるからよ。」

それから、半刻もせずに1人が馬を駆けて帰ってきました。

「報告！

西の彼方にあるサンドワームって化物ミミズの巣に向かっていく金髪美人を見たって旅芸人がいました。」

子分からの報告に盗賊の頭は首をかしげます。

「う～ん、そいつはいくら何でも別人だろう・・・・・・っておい！」

マルスは報告を聞いた瞬間に西に向かって駆けていました。

「待ちなって、おい！」

「頭ぁ、どうすんですかい？」

盗賊の頭は子供のような笑顔を見せました。

「追うに決まってんだろ。

コイツは面白くなりそうだ。」

それから、マルスは西の国の砂漠でサンドワームを全滅させました。そこで助けた村人から、「はるか南の港町には金髪に青い目の女の海賊がいる」と聞き、今度は南へと馬を向けます。

「金髪の女海賊に会いてぇだと？

へぇ、あんたがキャンデルのマルスかい？

相当腕が立つんだってな」

ある海賊団と仲良くなり、海を渡り、途中出会ったクラーケンの群れを切り払いながらも、マルスの頭にはただ１つだけ。

「ステラ姫ーー！どうか、どうかご無事で！」

はるか南の港町にいた女海賊はステラ姫の倍は横に膨れていました。

「なんだい、アタシに用じゃないのかい？

金髪に青い目、年の頃が１０代ってんなら、はるか東の島国に奴隷として連れて行かれたのを見たよ。

向こうの国は金髪が珍しいからね。よく覚えてるよ。」

聞くやいなや、マルスはまたも愛馬を駆り、東へと向かっていきま

した。

東の島国では、金髪の女の子ばかり集めているという殿様の噂を聞き、その城に攻め込んでいきます。

「大陸一の剣の腕前と聞くが、何するものぞ。

者ども、であえぇい。」

サムライという男たちをなぎ倒し、いざ女の子たちを解放してみると、確かに皆が金髪に青い瞳、そして美人ぞろいなのだが、年齢がステラ姫の半分ほどの子供ばかりでした。

手がかりのなくなったマルスはキャンデル国へ向かってうなだれながら帰路に着きます。

「ステラ、どこにいるのか。それとももうどこにもいないのか。」

マルスが絶望に打ちひしがれていると、目の前に黒い装束に身を包んだ男が現れました。

「大陸一の剣の使い手、キャンデル国のマルス様で相違ありませんか？

あなた様にステラ姫様から手紙を預かっております。」

そういって手紙を投げてよこすと、目を離した一瞬の隙に男はいなくなっていました。

『マルス、助けて。
ワタシは北方の軍事大国ガレアスに幽閉されています。
あなただけが頼りなの。』

なんともステラ姫らしくない文面でしたが、マルスはそれまでが嘘のようにガレアス国へ向けて馬を走らせました。

マルスがガレアス国の王都へ向かう道中で懐かしい面々が待っていました。

キャンデル国の騎士たち、東の森の盗賊、西の村の馬賊、南の海の海賊に東の島国のサムライたち。

「マルス様がガレアスへ向かうと聞きましたので、今度こそ我らの加勢が必要かと駆けつけさせていただきました。」

確かにマルスたちのいる崖上から見える王都の周りには何万という大軍が配備されていました。

「ありがとう、皆。今度こそステラ姫を見つけ、助け出すぞ！」

「「おおっ！！」」

マルスを中心に怒号が響き、崖からガレアス軍に突撃していきます。

双方の距離が５００ｍを切ったときにガレアス軍が真っ二つに割れ、馬を駆けてくる者がいました。

なんとその手に白旗を掲げています。

マルスたちの軍が急停止し、その白旗を持った使者がマルスに告げました。

「わが主がマルス様と二人で話がしたいと申しています。

どうぞ、お一人で着いてきてください。」

皆が口々に、罠だ、ふざけるなと叫ぶのが聞こえてきます。

「いや、行こう。姫が囚われているのだ。選択の余地はない。」

マルスは使者に連れられ、ガレアス城へ入っていきます。

なぜか、すれ違うガレアス軍の兵士たちはマルスへ敬礼していました。

違和感を覚えながら進んでいくと、玉座の間に続く扉の前に連れてこられました。

「ここから先は、どうぞあなた様だけでお進みください。」

使者がいなくなったのを見届け、マルスは扉を開けました。

「思ったよりもここまで来るのが遅かったわね。
ワタシを待たせて良いと思ってるの？」
玉座の上から話しかけてきたのは紛れもないステラ姫でした。
「姫！？これは一体・・・囚われているのでは？」
マルスは状況がまったく飲み込めず、混乱しました。
「このガレアス国はワタシが乗っ取ってやったわ。
王様が馬鹿で暴君だったからね。
クーデターを起こすのも簡単だったわ。」
ステラ姫はにっこりと子供のように笑い、マルスを手招きしました。
「それにしても、あなたも大陸最強の騎士なんて噂されるようになるなんてすごいじゃない。
あなたになら、ワタシの護衛をしてもらってもいいかな？
ちゃんと一生守ってよね。」
ステラ姫は満面の笑みのまま、両手を広げました。

マルスはステラ姫からのプロポーズとも取れるこの言葉に感極まり、ステラ姫を抱きしめるために走りよっていきました。

「ステラ、やっと、やっと見つけた。」

第２２話　演劇の奇跡～後編～

体育館にいる人たちは不思議な感覚に包まれていた。
音が耳ではなく、心に直接響いてくるような感覚。
知らず知らずのうちに劇の世界に入り込んでいく。
「さぁ、いよいよクライマックスだ。
ここから先はぶっつけ本番。
ナオちゃん、頑張れ！」
ボクはペンを休めることなく動かし、音楽を生み出しながらも、視線はナオちゃんへずっと向けていた。
どんなアドリブになっても、はずさせない。そんな決意を胸に秘めて。

シーンは騎士のマルスがガレアス城でステラ姫と再会する場面。
『思ったよりもここまで来るのが遅かったわね。
ワタシを待たせて良いと思ってるの？』
ナオちゃんの台詞でラストシーンがスタートする。

ボクはペンを走らせ、スポットライトをナオちゃんとタツヤ君にあてる。

玉座から立ち上がるステラと呆然とするマルス。

僕の書いた脚本だとここからマルスがステラに駆け寄って、二人が抱き合ってハッピーエンド。

『ステラ、やっと、やっと見つけた。』

ステラに駆け寄るマルス。

ボクはペンを走らせ、効果音を入れる。

バキッ！！

大きな音と一緒にステラ姫の右ストレートが炸裂した。

よっぽどキレイに入ったのか、マルスはその場に倒れこむ。

『ふふふっ、大陸最強の騎士を倒したわ。

これでワタシが大陸最強の女王よ。

あはっ、あははっ、あーはっはっは！』

高笑いするステラ。

そのままゆっくり幕を下ろしていく。

「４年Ｂ組の演劇“姫を探して”でした。
ありがとうございました。」
静まり返る観客席。
「ははっ、ちょっとやりすぎたかな。」
「ぷっ」
誰かが突然吹き出した。
それから一斉に笑い声が上がる。
「いやったー！」
いつの間にか、ミンナが音響室に集まってきていた。
「やるじゃん、ケンタ」
「面白かったね、すごいよ」
それぞれ役割を果たしてくれて、この作品ができたんだ。
その証拠にミンナの額から汗が流れている。
「さぁて、拍手が鳴り止まないから、カーテンコールだ。
役者は舞台に並んで。

あっ、タツヤ君はしばらく起きないと思うから舞台袖に移動さしといて。」

ボクはみんなに指示して、椅子にドカッと座り込む。

終わった。全身の力が抜けていくようだ。右腕も痙攣していた。

「おじいさん、ボクはミンナの望みを叶えられたかな？」

ペンをポケットにしまい、深く、深くため息をついた。

暗い部屋の中、ボクは沈痛な顔をしていた。

「ミンナ、よく頑張ってくれたね。

ボクらの劇は大盛況だった。それもこれもミンナの尽力だったと理解してる。」

暗い部屋の中にはクラスの面々が勢ぞろいだ。皆下を向いている。

「文芸会のランキング結果はミンナも知っていると思う。

この結果は全てボクの脚本に責任がある。

もっといい脚本なら必ずＵＭＪにミンナを連れて行けたんだろう。

」

パッと部屋の電気が点く。皆が一斉にボクのほうを向く。

ボクは声を張り上げ、こぶしを天井に向けた。

「今回は特別賞の温泉旅行で勘弁してくれ！

これはキミたちが勝ち取ったものだ！

それから今日の焼肉は杉田先生からの奢りだ！

どんどん食べてくれ！」

「えぇ「「おおっ！」」

杉田先生の驚きの声は皆の叫びにかき消され、それぞれテーブルではどんどん肉が焼けていく。

そんな皆を見ながら、ボクは店の店長へ挨拶に行く。

ボクらは地元の焼肉店『牛王イノウエ』に来ていた。

急なボクらの打ち上げに店を貸してくれたので、お礼を言っておかないと。

「ケンタくん、礼なんていらねぇよ。

うちも儲かるしな。

カナ！オメェも手伝わなくていいから、皆と一緒に打ち上げに参加しな！」

そう、ここはカナちゃんの家。エプロン姿で皿を運んでいくカナちゃんはいつもとイメージがぜんぜん違った。

「ケンタくん。ここに座りなよ。」

ナオちゃんが叩いた席には杉田先生が座っていたが、今はもうただの真っ白な灰になっていたので、押しのけてそこに座る。

「お疲れ様、ナオちゃん。いいパンチだったね。」

へへっと笑うナオちゃんだったが、その右ストレートは本当に見事だった。

タツヤ君の下あごにかすらせ、一撃で気絶させる。ちなみにタツヤ君は何も覚えていないらしい。

「ナオミはこの前、師範代になったんだよな。」

カルビを取りながら、シンちゃんがナオちゃんに聞いていた。

近藤流総合格闘術、ナオちゃんの家がやってる実戦向けの道場だ。

「そうだよ♪

もう道場じゃお父さんくらいにしか負けないよ。」

ボクが固まっていると、シンちゃんがボクの肩をポンポンッと叩く、頑張れよって。

周りでは文芸会の話で盛り上がっていた。
1位の「実録ドキュメンタリー・徳川埋蔵金発見」はうそ臭いとか、6年生の即興ラップライブはよかったとか。
「そういえばぁ、ケンタくんって舞台の音楽とか私たちに指示とかどうやって流してたの？」
ナオちゃんの一言でクラスの皆の視線は一気にボクへ。
まずい、何か言い訳しないと。神様がくれた力とか信じてくれないだろうしな。
「あれは、その。えーと」
シンちゃんが咳払いをして話し出す。
「オレの親父が作った骨伝導マイクとスピーカー。
もしものときのために体育館とお前らの服に仕込んどいた。」
何かのリモコンと小さなシールのようなものをチラッと見せる。
こっそりボクにだけわかるように片目を瞑る。
「そうなんだよ。シンちゃんに頼んどいたんだ。
こっちのほうが指示するのも早いし、音もいいから。」
おお～っと皆の声が聞こえる。単純な皆で本当に良かった。

一通り食べたあと、ボクはシンちゃんを誘って外に涼みにでた。

「助かったよ。ありがとう。」

シンちゃんは空を見上げたまま、別に、とつぶやいた。

「お前が皆に言いたくないんなら、別にいいんじゃないかと思ってな。

確かにペンを振り回して、音がでてくるなんて信じられることじゃない。」

その言葉にボクはシンちゃんに目を向ける。

「音響室の中が光ったから覗いたんだよ。実際見たオレも信じられないから、言って聞かせても皆信じられないだろうしな。」

シンちゃんはボクに向き直り、笑っていた。

「書いたことが現実になるペンなんだよ。

誰でも使えるものじゃないんだけど、こないだこのペンを使う力をもらったんだ。」

「誰に？」

「神様だよ」

シンちゃんは目を丸くして、それから声に出して笑った。

「オレはそういうの別に興味ねぇからいいけどよ。やっぱり秘密にしといたほうがいいかもな。

ただ、ナオミには教えてやれよ。そういうの秘密にしとくのしんどいだろ？」

ボクは空を見上げて、そうだね、と言った。

「何してんの？お肉なくなっちゃうよ！」

ナオちゃんが店の前で呼んでいる。

ボクらは顔を見合わせ、ハイタッチすると店に向かって歩いていった。

「ホントにありがとう、シンちゃん。」

「そうでもねぇよ。」

第２３話　旅行の醍醐味

今ボクはクラスの皆と一緒にバスに揺られている。

というのも、文芸会の特別賞でいただいた１泊２日の温泉旅行を１１月の終わりという中途半端な時期に行くことになったから。

何でも校長が「温泉はこの時期が一番気持ちいい」とか言ったからだそうで。

授業とかどうすんだよ、うちのクラスブッチギリで成績悪いのに。

まぁ、いいか。温泉に行けるんだし、今日と明日はゆっくりしよう。

あ、おじいさんにペンを返さないとな。これがあると便利だけど、使ったときミンナにばれないか、ドキドキするんだよな。

◆バス◆

バスが走り始めて１時間くらいした頃、一番前に座っていた２０歳くらいの女の人が席を立ってこっちを向いた。

知らない人だから、バスガイドさんかな？

「皆さん、本日は極楽バスをご利用いただきましてありがとうございます♪」

あぁ、やっぱりだ。ていうか、バス会社の名前すごいな。

「ワタクシ、本日急遽バスガイド役をすることになりました、校長の桜田カエデ、２３歳独身でございます♪」

「校長かよ！

ていうか、校長若っ！プロフィールとかいらないし！？」

ボクは盛大につっこんでしまった。

「ツッコミありがとう♪

そうサクラなのにカエデなの♪

面白いでしょう？」

「そこ、つっこんでないし！」

やばい、校長やばい。

いや、４年通った学校で初めて校長を見ること自体すでにやばいけども。

「ちなみに運転手は教頭の立畑（タテハタ）がしております♪

皆さん、シートベルトはしっかりしてくださいね♪」

「２ヶ月前に大型２種取ったばかりだけど、安心していいぞ。」

バスの運転手まんまの格好をした教頭はコッチを向いて親指を立てた。

「前を見ろ！マエェェェ！！」

一斉にシートベルトを締めようとカチャカチャさせる音が聞こえる。

「え～、それでは皆さん、左手をご覧ください♪

併走している電車の窓に泣きそうな顔でへばりついていますのは、あなた方の担任、杉田先生でございます♪

ワタクシが参加することになり、席が足りないのでバスを降りていただきました♪

あっ、目は合わせないで！いつもよりうざいですよ♪」

鬼だ。罪悪感の欠片もなく、すごいことをさらっと言いやがった。

この調子だとせっかくの温泉でもゆっくり出来そうにないな、ふ～。

「いいなぁ、ワタシもあーやってバスガイドやってみたいなぁ。

バスの醍醐味だよね、ケンタくん。」

ナオちゃんの一言にボクは苦笑いしか返せなかった。

◆露天風呂◆

温泉といえば露天風呂。

「はぁ、極楽、極楽。」

シンちゃん、リョウちゃんと並んで露天風呂で日頃の疲れを癒す。

「露天の熱燗がたまりませんなぁ。

ささっ、教頭もう一献。」

風呂にお盆を浮かべて日本酒をキュッとやってるおっさんが二人。

てか、追いつけたのか杉田先生。

「そういえば、こういう露天風呂って奥の方は女湯とつながってたりするんだよな。」

リョウちゃんの何気ない一言。

それを聞いてシンちゃんが笑う。

「そうだとしても、相手は小学生だぜ。見るモンなんか何にもねえよ。」

いや、ボクらも小学生だけど。

そんな会話をしていると・・・。

『校長先生ってすごいですね～。

何食べたらそんなセクシーになるんですか？』

『あら、近藤さんだって将来有望よ♪』

『そんな～、先生とカナちゃんに見てたらワタシへこんじゃう。』

『アタシは毎日牛肉食べて牛乳飲んでるからね。』

壁の向こうから妄想をかきたてる会話が聞こえてくる。

「すごい会話だね、ミンナ。・・・ってあれ？」

周りを見ると誰もいない。

「ケンタ、何してんだ。早く行くぞ。」

声のした方を見ると、杉田先生、立畑教頭、リョウちゃん、シンちゃんの順で桶をかぶりながら、奥の方へと進んでいた。

「さっきの会話と違うじゃん。どこ見るんだよとか言ってたじゃん。」

「馬鹿やろう！あの校長がいるとなれば話は別だ。」

「静かにせんか、見つかってしまうじゃろうが。」

「いやいや、そこの変質者。お前ら二人は完全に犯罪だ！」

ボクは訳のわからないことで叱りつけてきた教頭にツッコミを入れ

る。

（小学生でも犯罪です）

「そうかそうか、じゃぁケンタの分もナオミの裸を拝んできてやるよ。」

リョウちゃんの一言にボクもしぶしぶ参加することに。

いや、マジでしぶしぶだよ！？

素早く、そして静かに進んでいくボクら。

「う～む、湯はつながっていないが、そこの生垣の向こうから覗けそうだな。

やろうども、着いて来い。」

杉田先生、アンタ授業より意欲的じゃねえか！

ボクらは中腰で生垣を進む。

湯煙でよく見えないけど、向こう側からナオちゃんたちの会話が聞こえてきて、距離の近さがわかる。

「いい温泉ねぇ、肌がすべすべになるわ。」

「小学生のうちからそんなこと気になるものでもないでしょう？」

杉田先生のごくっと生唾を飲み込む音が聞こえる。このど変態が！

「いいか、そう～とだぞ。絶対に見つかるな。」

頭をゆっくり上げるボクら。

その時・・・

カポーンッ！

杉田先生の頭に桶がヒットした。

「やっぱりいたわね♪先程からガサガサ音がすると思ってたのよ♪」

「校長先生、任せてください！

近藤総合格闘流、桶時雨（オケシグレ）！！」

どういう技かわからないが、風呂場においてある桶という桶が時速２００ｋｍくらいで迫ってくる。

ボクらはとっさに一撃目で気絶している杉田先生を盾にした。

「逃げるぞ、皆の者。」

立畑教頭が年を感じさせない素早い動きを発揮し、ボクらもそれに着いていく。杉田先生を置いて。

「あっぶねぇ。」とリョウちゃん。

「生垣の中を進んだら、そりゃ音がするよな。」

シンちゃんの冷静な分析に納得したが、わかってたんならやめとけばよかったんじゃ・・・。

「ケンタ、覗きは露天の醍醐味だよ。」

諭されるように皆に肩を叩かれる。なぜか負けた気がした。

ボクらがあきらめて風呂から出るとき、桜田校長の高笑いと何かがボカボカと殴られる音が聞こえた。

「おーほっほ♪やっぱり覗き退治は露天の醍醐味ですわね♪」

◆懐石◆

温泉といえば懐石料理。

並んで皆で舌鼓を打つ、・・・はずが。

宴会場の端っこでミイラ男もとい包帯ぐるぐる巻きの杉田先生が泣いていた。

浴衣姿が色っぽい桜田校長のお仕置きだそうだ。

「教育者の風上にも置けない豚やろう♪」と書かれたプラカードを持たされている。

正直かわいそうだが、コッチに飛び火するのが怖いので無視するこ

とに決めた。

あ、この茶碗蒸しすっごい美味い！

やっぱり旅館の醍醐味は料理だよね。

◆卓球◆

カコン、カコン、カコン。

グリーンの台を跳ねる白い玉。

ボクとタクちゃんが卓球で遊ぶ。

「スッッマーーシュ！！」

カコッ。

「ヘッヘェ、これでボクの３勝だね。」

「ちぇ、ジュース何がいいんだよ。」

ボクらが一休みするすぐ横。

カッ、カカッ、カッ。

次元が違う。

ナオちゃんとリョウちゃんがものすごい激闘を繰り広げていた。
速攻型のナオちゃんとカットマンスタイルのリョウちゃん、二人とも一歩も譲らない。
「近藤総合格闘流、飛燕（ヒエン）！！」
ナオちゃんの放った強力なスマッシュがリョウちゃんを襲う！
「すごい！どんな格闘技なんだ、近藤流総合格闘術！！」
こんなときにもついついツッコミがでてしまった。
「うおっ、ジャイロ回転かよ！
だが、甘い！！」
何とか拾うリョウちゃんだったが、ナオちゃんの奥義の連続で押され気味だ。
「このままじゃまずい！
ん、そうだ。」
リョウちゃんはボクをチラッと見てナオちゃんに向かって叫んだ。
「ナオミ！浴衣がはだけてケンタがヤラシイ目で見てるぞ！」
「え！？」

ナオちゃんは慌てて両手を胸の前に持ってくる。
その瞬間、リョウちゃんがスマッシュを叩き込み、リョウちゃんの勝利が確定した。
「よし！！いくら何でも女に負けるわけにはいかねぇからな。」
高笑いしながら、去っていくリョウちゃん。
いや、この場の空気の責任とってから退場してよ、ねぇ。
「ケンタくんのエッチ！！」
ナオちゃんの投げたラケットは、ジャイロ回転しながらボクの顔面にめり込んだ。
駆け引き、それは勝負の醍醐味。

◆就寝◆

ボクらは4人部屋で頭を寄せ合って布団に入っていた。
「なぁ、もう寝たか？」
タクちゃんがもぞもぞと動きながら聞いてきた。
モチロン寝てるわけがないが、特にこれといってする事はない。

「そういえば、ケンタはナオミと次のデートの約束はしてんのか？」
リョウちゃんが不意に聞いてきたが、そんな予定は立てていないので、首を振る。
「マジかよ。もうすぐクリスマスだぞ。どっか誘っていけよ。」
と、タクちゃん。
シンちゃんは頭の下に両手を持ってきて、天井を見ていた。
「ケンタは純情なんだよ。それぞれペースってモンがあるさ。」
「ちぇ、シンゴはクールだな。クリスマスはリョウとオレと3人でどっか行くか？」
タクちゃんの誘いに、シンちゃんはボクらの方を向いて言う。
「いや、オレはクリスマスはカナと東京デスギーランド行くんだ。」
・・・・・・ちーん。
「えええええぇぇぇぇ！」
一瞬の静寂のあと、ボクとリョウちゃん、タクちゃんの叫び声が上がる。
「なんで！？え？え？
シンちゃんとカナちゃんって付き合ってんの？」

「ああ、ずっと一緒にいるからな。
なんとなくそんな感じになった。」
さらっと言うシンちゃんにリョウちゃんが切れる。
「てめぇ！何でそんな大事なこと、オレらに黙ってんだ！」
「そんな大した事じゃないだろ。
特別何かするわけじゃないし。」
ボクら3人にはこのときのシンちゃんはめちゃめちゃ大人に見えた。
そして、なんか悔しかった。
「だからって「うるさ～い！！！」
ボクらの部屋の襖が吹き飛んだ。
ビックリしてそっちを見ると、顔に白いパックを張り付けた桜田校長が真っ赤なオーラを背負って立っていた。
「キミたちのくだらない大声でアタシのスキンケア&安眠の時間が削られるじゃない！
全員表に出なさい！！」
ボクらは廊下に出ささされ、正座させられてしまった。

「い～い？３０分したら部屋に戻っていいけど・・・

次に騒いだら、殺すわよ♪」

ボクらは校長の本気の目とパックを張った顔が恐ろしくて、正座のままピクリとも動かなかった。

恋の話に廊下で正座。学生の醍醐味だな。

◆家に帰るまでが◆

ボクらは旅館の皆さんにお礼を言い、帰り支度を整えてロビーに集まった。

あとは桜田校長が締めの言葉を言ってバスに乗り込むだけだ。

「皆さん♪

家に帰るまでが旅行ですよ♪

一人も欠けることなく、無事に家に着くことを祈ってますわ♪」

校長の向こうでは、すでにバスの中に立畑教頭が運転席でスタンバイしていた。

「「いいいいやぁぁぁぁ！！」」

平和。それは命の危機が迫ったとき、脳裏に浮かぶ人生の醍醐味。

第２３話　旅行の醍醐味（後書き）

今回はショートパターンで書いてみました。

少し長くなってしまったので、申し訳なく思います。

たまにはこんなパターンも面白いかな。

第２４話　信じる者を救いたい

「・・・そうして、サンタクロースは西の空へ飛んで行きました。

おしまい。」

パチパチパチッ！

ひときわ大きな拍手をくれるのは、ナオちゃんとその周りにいる１年生くらいの女の子たち。

今日は朗読会の日。ナオちゃんが道場に通う子供たちを連れてきてくれた。

その子達のリクエストでサンタの話をすることに。

「さぁ、みんな。あったかいミルクティーをどうぞ。」

サトおばさんが子供達にコップを手渡していく。

ボクも受け取り、一息つく。

「なかなか良い話じゃったよ、ケンタくん。」

おじいさんとシンちゃんがボクの横に腰掛ける。

シンちゃんとカナちゃんも朗読会を聞きにきてくれるようになった。

「ケンタは将来おじいさんみたいに本を書いたりしたいのか？」

シンちゃんが何気なく聞いてくる。

「ん～、まだ分かんないな。本を読むのも、こうやって話すのも好きなんだけど。

本を書くのは難しいよね。」

「まぁ、将来のことじゃから、ゆっくり決めるといいじゃろう。

もちろん、ワシはケンタくんがモノカキを目指すなら協力は惜しまんよ。」

ミルクティーを一口飲んで、ボクは頭の中をすっきりさせる。

将来か。大学に行く気はないから、１０年後にはもうボクは働いているだろう。

何だかそのときの自分なんてぜんぜん想像できないな。

おじいさんみたいに皆を感動させられる仕事ができたら、確かにいいな。

「ありがとう、おじいさん。ゆっくり考えてみるよ。」

「え！？カナちゃん、まだサンタさんにお手紙書いてないの？

クリスマスは1週間後よ！」

子供たちに混ざって話をしていたナオちゃんの一際大きな声が聞こえた。

どうやら、話題はサンタのプレゼントのようだけど。

小さな子達と一緒に心配そうな目を向けているナオちゃん。

困った顔をしてコッチに助けを求めるカナちゃん。

ボクとシンちゃん、そしておじいさんは顔を見合わせた。

「どうしたの？」

「ケンタくん、カナちゃんがね。まだサンタさんにお手紙を書いてないみたいなの。

早くしないと、プレゼントがもらえなくなっちゃう。」

もしかして、ナオちゃんは。

シンちゃんがあきれた顔をしている。

「あのな、ナオミ。サンタなんて、んぐっ。」

シンちゃんはおじいさんに口を塞がれる。

「ほっほっ、大丈夫じゃよ。まだまだ間に合うわい。」

おじいさんがシンちゃんを後ろから抑えながら言った。

ああ、やっぱり。

ナオちゃんはサンタクロースが本当にいると信じてる。

そのとき、ナオちゃんが連れてきた女の子が叫び声をあげた。

「大変です、師範代！

アタシの家、煙突がありません。」

本気で心配している女の子。

「大丈夫よ。

サンタさんは玄関とか窓に鍵がかかっててもすぐ開けちゃうんだよ。」

ナオちゃん、それはピッキングです。

「ボクのパパが最近物価が高いから、今年はサンタさんは来ないって言ってた。」

男の子がガッカリしながら愚痴をこぼす。

現実的だな、この子のお父さん。

「心配しないで。

サンタさんはクリスマス以外は、株でデイトレードしてすごくお金持ちなのよ。」

どんな設定のサンタですか？

でも、クリスマスにプレゼントが無かったら、この子達はすごくガッカリするんだろうな。

ボクはおじいさんに目を向ける。

おじいさんもボクの言いたいことがわかったのか、大きく頷いてくれた。

よし、この子達のために一肌脱ごうじゃないか！

「ねぇ、ミンナ。

ボクがサンタさんに頼んであげるから、ミンナの家がどこにあるか教えてくれるかな？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3198d/

おじいさんのペン

2010年10月10日07時51分発行